

都市における緑地としての社叢空間の評価に関する研究（1） —緑地と社叢空間の関係及び変遷—

藤田直子 *

Study on evaluation of “Shasoh” space as a green space in urban areas (1) —The relations and changes between green spaces and the space of “Shasoh”—

Naoko FUJITA *

はじめに

第1章 序論

- 1.1. 研究の背景
- 1.2. 研究目的
- 1.3. 研究方法
- 1.4. 既往研究の整理

第2章 緑地に対する空間認識の変遷

- 2.1. 本章の目的
- 2.2. 本章の研究方法
- 2.3. 結果
 - 2.3.1. 神道の空間認識における「自然」の位置づけの変遷
 - 2.3.2. 日本人の「自然」に対する空間の認識および西欧との比較
- 2.4. 結論

第3章 類義語の比較による“神社の屋外空間”に対する空間概念の明確化

- 3.1. 本章の目的
- 3.2. 本章の研究方法
 - 3.2.1. 研究対象
 - 3.2.2. 書籍・論文出現頻度に関する分析方法
 - 3.2.3. 語彙の概念に関する分析方法
- 3.3. 結果
 - 3.3.1. 書籍・論文出現頻度に関する分析
 - 3.3.2. 語彙の概念に関する分析
- 3.4. 結論

* 東京大学大学院新領域創成科学研究科

* Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo

第4章 法の成立・運用の過程における「社叢」の概念及び位置づけ

4.1. 本章の目的

4.2. 本章の研究方法

4.3. 結果

4.3.1. 史蹟名勝天然紀念物の誕生とそれに関連する法律

4.3.2. 史蹟名勝天然紀念物保存の検討期における「社叢」の概念

4.3.3. 「社叢」と白井光太郎

4.4. 結論

第5章 本論文の結論

おわりに

謝辞

要旨

引用文献・注釈

Summary

はじめに

現在の日本は都市化時代から都市再構築時代への歴史的転換期に位置し、環境への配慮を意識した調和ある環境共生型社会への変化を模索中である。しかしながら明治維新以来、都市化が進行する過程において緑地は急速に減少し、本来樹林が持つ多様な環境保全機能が有効に発揮される機会が減少していった。都市の中心部では均質な空間整備が行われたことにより緑地の多くが減少し、地形と緑地の偏在性が更に強まる傾向も確認されている¹⁾。このような時流の中で、近年ではいかにして新たな緑を生み出すかに注目が集まり、研究のトレンドもそれに追従する傾向にある。我々は、その最たる事例を高層ビルの屋上緑化や大規模再開発に伴う公開空地の緑地創出などに見る事ができる。

人間活動が自然に与える影響や、都市における人間と自然のつながりを考察する事は、都市に存在する自然環境の在り方を把握する上でも重要である。人間活動が生態系の多様性を減少させ単純化する状況のもとで人間・都市・自然の関係を正しく考察する必要があるだろう。特に、歴史的に評価されうるような樹林においては、それらの場の重要性を十分に認識する必要がある。

このように、都市化による土地利用の変化やそれに伴う緑地の消失という事態に常に瀕している現代社会において、神社の樹林地である社叢空間は、他の土地利用と比較すると存在としての空間そのものを消失することが少ないまま現在まで保持されている稀有な存在であるといえる。しかしながらその空間に対する緑地としての位置づけは弱く、それに着目した研究の蓄積も少ない²⁾。

本論文は、2006年に東京大学に提出した学位論文の前半部分であり、後半における現状の実態分析及び評価のための概念整理と位置づけることができる。本研究の立脚点は「緑地」という視点を通して時間的な軸と空間的な軸から社叢空間を捉えようとするところにある。人間の関与の割合が高い場合、環境と空間は実態的側面と同時に意味の側面も相対的に強くなる。近代以前から現代に至る空間認識や空間構成を捉えるに当たり、現在の空間計画の課題と歴史文化として伝承された空間を結ぶ空間概念³⁾が必要となる。人間が空間について興味を持つということは実存に根ざしているといわれ、それは人間が環境の中に生きた関係を掘み取り、出来事や行為の世

界に意味や秩序を持ち込もうとする要求から生ずる⁴⁾ともされている。そしてそれは時代によって変化するものでもある。複合的な性質をもつ『都市』を対象にする以上、場所の解析のみでは空間の構成要素の一部しか明らかにすることは出来ない。それを補完するためには時間的な軸からの解析が必要であり、それには史料の分析が必要であると考えた。問題群に多面的に対応するための態勢の枠組として、空間的視点だけでなく、時間的な視点も導入することは、環境の価値構造を考える面でも注目され⁵⁾、特に時間的な視点を導入するということは、伝統的・歴史的なものに対する配慮を問題の本質理解や解決手段に組み込む事を意味するという点で重要であると考えられる。

本研究で主に扱う神社の施設以外の部分（open space）の中で、特に樹木が生育している部分（green space）を指し示す言葉としては社寺林・鎮守の森・境内林などが用いられるが、『社叢』もその一つである。つまり端的にいうと“神社に存在するみどりの空間”ということになるが、この言葉自体が一般に認知されているとは言い難く、また定量的にも定まっておらず、何を以って社叢といえるのかははっきりしない。本研究ではこの『社叢』という言葉に着目し、歴史的な変遷と類義語との比較によってこの言葉を用いる根拠を示すと同時に、各々の空間概念の差異とその背後にある意図を明らかにする。

本論文では、自然に対する神道の空間認識が日本人の自然に対する空間概念の形成に関与していることを明らかにするために、神道の空間認識における「自然」の位置づけの変遷と日本人の「自然」に対する空間認識の変遷、類義語の比較による“神社の屋外空間”に対する空間概念の明確化、「社叢」に関わる法の成立・運用の過程における位置づけや言葉の使われ方の変遷を分析することにより、神社の屋外空間に焦点をあて、神社の空間を緑地という視点で評価することの妥当性とその根拠を明らかにすることを目指した。本論文は神社という空間を対象とするために、神道や宗教に関しても詳細に検討する姿勢をとっている。だが、それはあくまでもその中に存在する自然に対する意識や実態を読み解くことを目的としており、宗教的に神道を深く追求していくものではない。従来の神道史に関する書籍の中では、自然との関係を述べているのは古代の神道発生に関する部分に関する記述が多く、その後は政治的な部分に対象が限定していく傾向が強い。しかし、明治維新後百四十年戦後六十年の現在、神道側も今後へ続く新たな道、つまり現代や未来に適応する観点を模索する必要がある。特に『自然と共に生きる』という神道の基本的姿勢へ再度目を向ける必要があると考えられる。

しかしながらそれ以前の問題としても、神社は宗教空間という性質上、現在に至るまで緑地空間として自然的見地から総合的に評価されることは無かった。しかし緑地自体が稀少な都市においては社叢空間は継続的に担保される空間としても価値が高いと考えられ、また都市化の影響を反映する指標ともなり得る場である。さらには宗教施設としての枠組みを越えて都市の景観を豊かなものとし、エコロジカルネットワークの拠点など新たな価値を秘めた空間であり、これらを総合的に調査・分析し評価する事の重要性は大いにある。

一方で神社と寺院は、両者共に宗教空間であるという側面から社寺という一語で扱われる場合が多くみられるが、空間として場を読み解く上では必ずしも妥当ではないと考え、本研究では神社と寺院を意識的に区別した。なぜならば、神道と仏教は各々の歴史的経緯に様々な要因が潜んでおり、その差異は空間にも反映されていると考えられるからである。

さらに近年改正された都市緑地法では、緑地保全地域について、地方公共団体や緑地管理機構が所有者に代わって管理を行う旨の条文が追加された。また特別緑地保全地区制度の指定要件に

も社寺地に関連した緑地を保全する制度が設けられている。社寺境内地は私有地でありながら公共空間としての側面を併せ持つ空間であり、またその管理は主に所有者である神社や寺院、もしくは氏子や檀家が行うのが通例である。しかしながら、それらによる管理には、現実には社寺地が本来持つべき歴史性や自然に対する認識への考慮を欠いた管理がなされているという問題を抱えている。その結果、都市内社寺地の緑地は公園と何ら相違無い表情を持つ箇所が非常に多く見られる。本研究の成果が上記の制度の活用に寄与し、より適切な管理への可能性を提示できれば望ましい。

第1章 序 論

1.1. 研究の背景

都市において緑地に代表される自然的な空間は、時代と共にその意味を変化させながら現在まで存続している。明治維新を基点とした江戸から東京への転換は日本中の様々な場面で空間認識が大きく変化した時代であり価値観の転換の大きなエポックである。例えば江戸から明治にかけて起こった転換期や1970～75年にかけて起こった転換期などが指摘されているが、自然的な空間が「何」とのかかわりの中で変化をしたかに着目するかによってその立場や時期は異なる。

一般的に何らかのある施設が別の施設に変化するとき、同時にその施設の“空間”に対する役割や認識も変化する。都市化によって神道は衰退したのではなく、変容を迫られたというのが実態に即した理論であるが、変容を迫られた神社は、都市化に適応したのであって、その形態は往々にして伝統的な村落共同体における神社とは異なった姿をとらざるを得なかった⁶⁾。神社の空間を、日本人の自然観に則して生み出された空間であるという視点に立つ本研究においては、現代の神道が現代日本社会においてその制度的基盤の一部が切り崩されていることや、都市化・情報化との関係は無視出来ない事象の一端である。

また都市における緑地は、自然と歴史との象徴が二重写しになったある種の風格を帯びた空間⁷⁾であるともいわれる。過去の人間の営みが刻み込まれている都市の樹林や樹木には、社寺境内林・古墳林・一里塚・旧街道の松並木・特定の歴史的事件や物語と結びついたものなど⁸⁾多岐に亘る。また、気候風土や慣習が育まれた土地固有の歴史を読み取ることが出来る場として、単に歴史的象徴に留まらず、都市そのもののイメージを支える次元の高い象徴にも成り得る。

幸いにも神社の空間に対しては様々な価値が期待され始めており⁹⁾、従来の宗教的側面からだけではない部分にも高い評価が寄せられている。特に緑地として神社のオープンスペース部分を評価することは今後の環境問題を考える上でも有効であると考えられる。しかしながらその空間に対する統一された呼称は存在せず、研究者の中でも統一されていないのが現状である¹⁰⁾。「神社林」「鎮守の森」「社寺林」など同じ空間を指して用いられる言葉が乱立しているのが現状であるが、しかしながら各々の語は全く同じ意味として用いられているとは考えにくく、それぞれ異なる意味が含有されていることには間違いない。だからこそ、各々の場面で用いるにふさわしい意味が込められているはずである。

今現在「社叢」という言葉に対する一般的な認知度や認識度は低く、この語から喚起されるイメージにはかなりばらつきがある。事実既往文献^{11)・12)}などにおいても、各々に用いられる「社叢」という語が示す具体的対象やイメージには相違が認められる。現実の空間は様々な現象の蓄積の結果であるゆえに多面性を持っているが、その空間を示す適切な用語が整理されなければ、

定義や位置づけが各々曖昧なままとする。その結果、過去の研究蓄積が活かされないという弊害も生じる。

このように認識が浅く一般的に認知されているとはいえない「社叢」という言葉であるが、しかしながら公的な制度の中では文化財保護法やその一部の前身にあたる史蹟名勝天然記念物保存法において、天然記念物の植物の項に「社叢」が記載されており、実際現在までに全国で18箇所の社叢が天然記念物として指定されている。現在の文化財保護法では、天然記念物の植物の第一要目に「一、名木、巨樹、老樹、畸形木、栽培植物の原木、並木、社叢」として規定されている。さらに史蹟名勝天然記念物保存法の中においては、天然記念物の植物の一要目の第一番目に、「一、社叢、著シキ並木、名木、巨樹、老樹」として規定されていたという事実が存在する。

地域空間における神社とその森の意味と機能に関しては、1960年代以前には生活空間を扱う分野や空間計画の分野において位置づけされていなかった¹³⁾。近代以前から継承されてきた神社の森や農業空間が空間計画の重要な側面である環境管理などにおいて、近代化の中で重要な役割を果たしてきたことについて理解され始めたのはあまり古いことではない。だがその後開発を経て課題とする事例が現れた1970～1975年が転換期となり、生活空間の計画に際して身近な自然環境や文化・景観に対する評価が注目されるようになった。自然や身近な文化的環境的遺産を把握するには、近代以前から継承されてきた空間認識及び景観構成をシステム及び計画手法として理解し位置づけることが必要になっており、現在では都市や地域を計画する際、自然や歴史的な経過と環境・景観などはさらに重要な検討事項になりつつある。しかしながら、東京(江戸)の宗教空間は、一般的な日本のそれとは異質であるという指摘もあり、庭園的な利用が主であったとも言われ、江戸～明治初期に転移されたものがあるというのも事実であるため注意が必要である。神社を含む「自然」の空間は、幾度かの転換期を経て現在の認識を得ているといえる。

一方で、空間を場所という言葉に置き換えてみると、イーファー・トゥアンはその著書「空間の経験」¹⁴⁾の中で、場所と宗教に関して次のような指摘をしている。つまり、人間を場所に縛り付けるものとして“土着の”宗教の特徴を挙げ、過去に対する強い感覚、場所の中での血統と連続への強い感覚を生むとしてこれを普遍的宗教との差であるとしている。そして超越的普遍的宗教において提起されるような、時間を超越した永遠的価値よりもむしろ、連続性の感覚こそが安心感をもたらすのである¹⁵⁾と指摘している。

1.2. 研究目的

本研究では、以上に述べた社叢空間における特性を踏まえ、神社の空間を緑地という視点で評価することの意義と妥当性を明らかにすることを目的とした。そのために、“神社の屋外空間”に対する空間概念を明確にするとともに、その空間を表現するのに相応しい語彙を明確にした。具体的には、

①空間に対する認識の変遷を「自然」との位置づけの関係から分析することで、日本人の自然に対する空間概念形成を明らかにすること

②“神社の屋外空間”を指して用いられる「社叢」「鎮守の森」「社寺林」といった類義語を比較して各々の言葉の意味や意義を分析することにより、同一の空間に対して複数の言葉が用いられる原因とその背景にある意図を明らかにし、神社のオープンスペースに対する緑地の空間概念の差異と特徴を明らかにすること

③法の成立・運用における「社叢」の概念及び位置づけを明らかにすることにより、“神社の

表-1 本論文における「緑地」「制度緑地」および「自然」の定義
Table 1. Definitions of [Ryokuchi], [Seido-Ryokuchi] and [Shizen] in this study.

本論文で用いる語	定義
緑地	樹木・樹林が存在する空間 (green space)
制度緑地	法律で定義されている緑地
「自然」	「」付きで「自然」と表記する 自然的なものを包括するものという意味で用いる 具体的な対象は森林, 樹木, 岩など 但し時代によってその意味は流動する

屋外空間”と“社叢”の空間概念を明確にすること

以上の3点を研究目的とした。

なお、「緑地」ということばが指し示す内容には幅があり、その概念や機能には様々な要素が複合的に含まれている。そこで本論文では緑地を表-1のとおりに定義して用いることとした。樹木や樹林が存在する空間を green space という意味で緑地と定義し、法律で定義される緑地¹⁶⁾は制度緑地とすることで各々を区別した。また、神道に関わる自然観では本研究で指す緑地の定義に含まれる概念よりも広範な「自然的なものを包括する概念」を表す語が必要であったため、これを表現する語として「自然」を用いた。また特に“自然”と表記する場合は“nature”の概念に對して用いる語として用いた。

1.3. 研究方法

本研究では、研究内容に関わる文献を広く蒐集し、語彙の背後に隠された意図や意義を分析するという方法を主に用いるが、語彙を明らかにする研究の意義は次のように指摘され、その意義が認められている。『用語がいつ誰によって造られたかを究明してみることは、熟語の持つ語義とかその社会的背景などを考えてみると、やはり重大な意義を持つ。(略)用語は常にそのものが持っている本質的なものを最も正直に伝承してゆくものであるからである』¹⁷⁾。

まず、第2章「緑地に対する空間認識の変遷」では、神道の空間認識と「自然」の位置づけの変遷を明らかにするために、分析対象として史料・論文・書籍から「神社」「神道」「自然」等に関わる内容を広く蒐集し、これを用いて神道において「自然」がいかなる存在であり、時代ごとに空間認識の上で位置づけがどのように変化していったのかを整理分類し分析するとともに、日本人の自然に対する空間認識、「自然」に対する西欧との比較について分析した。次に、第3章「類義語の比較による“神社の屋外空間”に対する空間概念の明確化」では、“神社の屋外空間”に対して複数の言葉が用いられる原因とその背景にある意図を明らかにするために、分析対象として史料・論文・書籍から「社叢」「鎮守の森」「社寺林」に関わる内容を蒐集し、語彙自体の使用の変遷を明らかにするための書籍・論文出現頻度分析と、機械的処理では現れない部分を明らかにする語彙が想定する対象を広く収集分析する語彙対象範囲分析を組み合わせることによって、量的側面と質的側面の双方からそれらの実態を分析した。そして、第4章「法の成立・運用の過程における『社叢』の概念及び位置づけ」では、社叢の解釈及び位置づけを明らかにするために、分析対象として雑誌『史蹟名勝天然紀念物』における全ての記事の中から、社叢、神社、

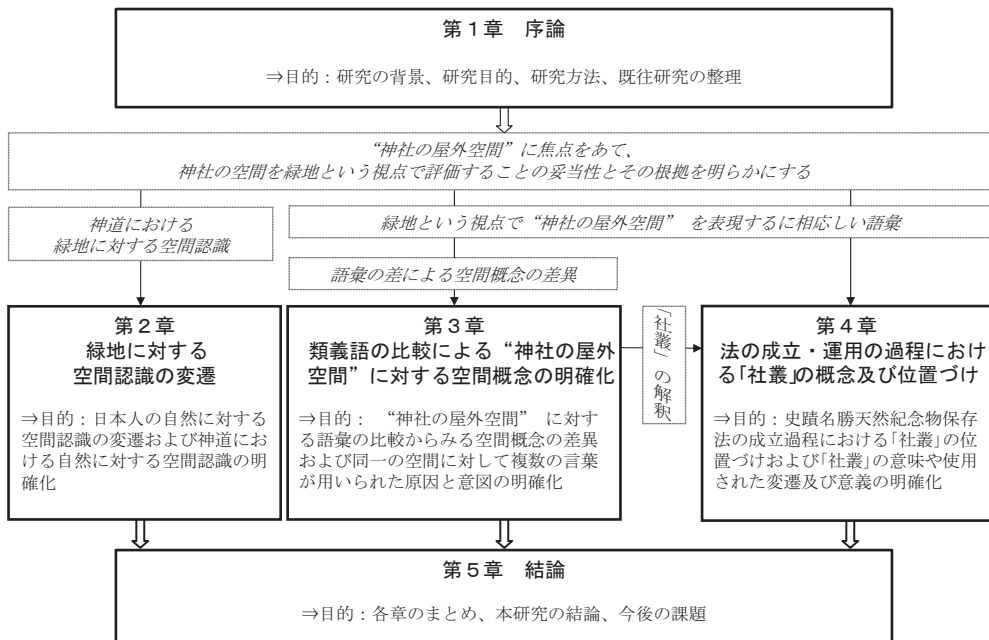


図-1 本論文の構成
Fig. 1. The construction of this study.

社寺、及びそれに関連する記事を抽出し、いかなる認識の下で社叢が位置づけられていったのかを分析した。最後に第5章では、第2章から第4章の結果をまとめるとともに本研究の結論を述べた。なお、これらに対応する本論文の構成を図-1に示した。

1.4. 既往研究の整理

まず神社が関わる空間の変化に関して『日本の空間認識と景観構成』について論じた宇杉¹⁸⁾は、近代以前にあった地域固有の空間構成のメカニズムを近代的空間整備手法と比較関連付けるシステムを発掘し整備することに着眼し、地域空間計画の立場に立って“地形と風土を大切にしたい生活空間づくり”に資する基本的計画理念・計画手法の確立を目指し、近代以前の生活空間の空間認識と景観構成のありようを分析・把握することから、その今日的価値を考察した。その中で近代以前の空間が系統立って理解されていないこと、計画手法のなかに近代以前の空間の位置づけが無かったことなどを通じて、既存の集落と新しい居住者の交流や、環境や景観に対する配慮が徐々に始まることを指摘した。特に1960年代に注目し、開発によって生じる計画的空間と近代以前から継承された空間のずれを指摘した。それは台地と丘陵の境に多く神社があり、神社は山を背後にし、山を祀っている。背後の山に住宅団地が出来ると神社が存在する基盤がなくなる。これは神社の存在基盤が危うくなること、さらに神社が象徴している地域空間の秩序が変更されることを示しているが、神社が象徴している地域空間の秩序については検討されること無く

計画が実施されてきた事を述べた。さらに緑地についても、従来の林は地形の要所(斜面や川のそばなど)にあり、周囲の緑と結びついていたものが、林が切り開かれ、団地の中央に遊び場としての公園が出来る事を述べた。神社の森はその発生的経過からみて、施設としての神社建築に意味があるのではなく、その環境である自然の認識により大きな意味がある。地域空間計画の視点からみれば、神社の森がこれまで地域の自然環境・景観保全に果たしてきた役割は大きい。生活空間との結びつきからみれば、コミュニティの“中心を持つ空間”における神社と神社の森をもつ存在意識・景観・象徴性に注目する重要性がある。

次に、書籍や論文の出現頻度を分析した研究に関して、日本造園学会における多様化する造園学研究の動向に対し、論文キーワードの頻度分析という方法を用いて論じた興水・熊谷(1985)¹⁹⁾の研究や、論文のデータベース化を行い様々な角度から動向を把握した日本造園学会情報化小委員会(1991)²⁰⁾、公園や緑地に関わる日韓の研究動向の比較を行い、その傾向と差異を明らかにしたFUJITAら(2004)²¹⁾の研究が挙げられる。また、ある項目に特化して研究動向を扱ったものでは、農村空間の生物相・景観保全に関する近年10年間の動向²²⁾、生物多様性保全に関する動向²³⁾、ガーデニングブームの動向を雑誌や書籍の出版動向及び記事内容を通してその実態を把握した研究²⁴⁾が行われている。

次に、天然記念物・文化財保護に関する研究に関して、平澤²⁵⁾は名所旧跡に対する「文化財」としての保護措置に関して、1985年の古社寺保存法第19条について論じた。それによると「名所旧蹟ニ関シテハ社寺ニ属セサルモノト雖仍本法ヲ準用スルコトヲ得」として明文化されたことをはじめとするが、議会において法律名称の示す主旨と異なる旨の批判があったとともに、実際にはその保存に係る経費が無かったことから事実上機能する事はなかったとされている。

また亀井ら²⁶⁾は、制度による植物保全の効果を指定と保存管理の側面から明らかにすることを目的とし、天然記念物制度による植物保全の効果を明らかにするために、保全対象の選定などの指定と管理状況や被害状況など保存管理に関するものから植物に関連する天然記念物を分析している。ここでは比較的多くの種類を保全してものの対象により偏りが見られ、全体として代表性を満たしていないこと、指定地そのものに対する大規模な改変は制限されているが、盗掘や踏みつけ・周辺環境の変化・自然災害・遷移の進行や外来種の侵入などの被害を受けた物件が半数近くあることが指摘されている。また亀井ら²⁷⁾は、天然記念物制度の指定方針とその変遷を明らかにするため、植物に関する国指定天然記念物の指定の実態を分析し、その時間的変遷を整理している。ここでは、戦前は自然破壊の阻止、学術資料の保存、郷土や国家への愛情の向上という3つの意図を持ち、偏りがあるとはいえ指定対象は多岐にわたっていたが、第二次世界大戦での敗戦によるナショナリズムの後退と高度経済成長が齎した深刻な自然破壊によって、学術有意が定着すると共に、珍奇なものから代表的・一般的なものへと保護すべき対象が変化した事が指摘されている。また赤坂²⁸⁾は、植物学者三好学が建議しようとした天然記念物保存に、史蹟が加えられた意味を考察し、史蹟とは大部分が古墳であり、古墳は皇室との関係が深いものが多く、史蹟を保存の対象に加える事で国体の護持の方向へ合流する事になることを指摘している。

第2章 緑地に対する空間認識の変遷

2.1. 本章の目的

神社の空間を緑地という視点で評価するには、最初に日本人の自然に対する空間認識の歴史の変遷を明らかにするとともに、そこに関わる神道における時代ごとの自然に対する空間認識との関係を明らかにする必要がある。変遷を明らかにする作業は、日本における緑地に対する空間認識の概要を掴むためにも有効であると考えられる。

従って本章では、空間に対する認識の変遷を「自然」との位置づけの関係から明らかにすることで、日本人の自然に対する空間概念を明らかにすることを目的として研究を行った。

2.2. 本章の研究手法

本章で分析対象としたのは、論文・書籍から「神社」「神道」「自然」等に関わる内容が記載されている記事とした。分析対象記事は4,159件であり、555文献から自然と神道の関係に関する部分を選出して用いた。作業としては、まず文献から分析対象となる記事を原文のまま抜き出しテキスト化し、次に神道の空間認識と「自然」の位置づけの変遷を求めるために、神道において「自然」がいかなる存在であり、時代ごとに空間認識の上で位置づけがどのように変化していったのかを整理して時代を分類し、各時代において解釈を加えて述べた。次に、日本人の自然に対する空間認識を求めるために「自然」に対する西欧との比較を行い、解釈を加えて述べた。

なお、論文中に記載した年号名と開始年・終了年は、表-2に示す日本史年表地図（児玉幸多編，2004）²⁹⁾による時代区分に従った。

表-2 日本史時代区分
Table 2. Division of Japanese history.

時代区分	年号	始(西暦年)	終(西暦年)
日本の原始	原始時代		
	縄文時代		
日本の古代	弥生時代	紀元前3世紀	3世紀
	古墳時代	3世紀後半・4世紀初	7世紀前半・8世紀初
	飛鳥時代	6世紀終末	710
	奈良時代	710	784
	平安時代	794	1184
日本の中世	鎌倉時代	1192	1334
	南北朝時代	1334	1392
	室町時代	1392	1573
日本の近世	安土桃山時代	1573	1598
	江戸時代	1603	1868
日本の近代	明治	1868	1911
	大正	1911	1926
	昭和(終戦前まで)	1926	1945
日本の現代	昭和(終戦後から)	1945	1989
	平成	1989	

2.3. 結果

2.3.1. 神道の空間認識における「自然」の位置づけの変遷

空間認識の変遷に関する分析の結果、時代区分は表-3に示す7期に分けることが出来た。各々の時代の分析に用いた記事数と文献数を図-2に示した。本研究の分析に蒐集した記事の総数4,159件のうち、記事数が最も多かったのは近代の部分であった。この時期は、公園の創設や神仏分離や神社合祀など、短期間で大きな変化が齎された事と対応していた。

表-3 空間認識の変遷に関する時代区分の結果
Table 3. The period of the spatial recognition for Shintoism.

内容	該当する時代区分 (表-2)
神道の発生から成立まで	原始 - 古代
仏教伝来から神仏習合まで	古代
神仏習合から本地垂迹説の成立まで	古代 - 中世
神仏習合期から神仏分離令・廃仏毀釈まで	近世 - 近代
公園としての位置付け	近代
神社合祀期から緑地概念の誕生まで	近代
現代的な問題と緑地の解釈の拡充	現代

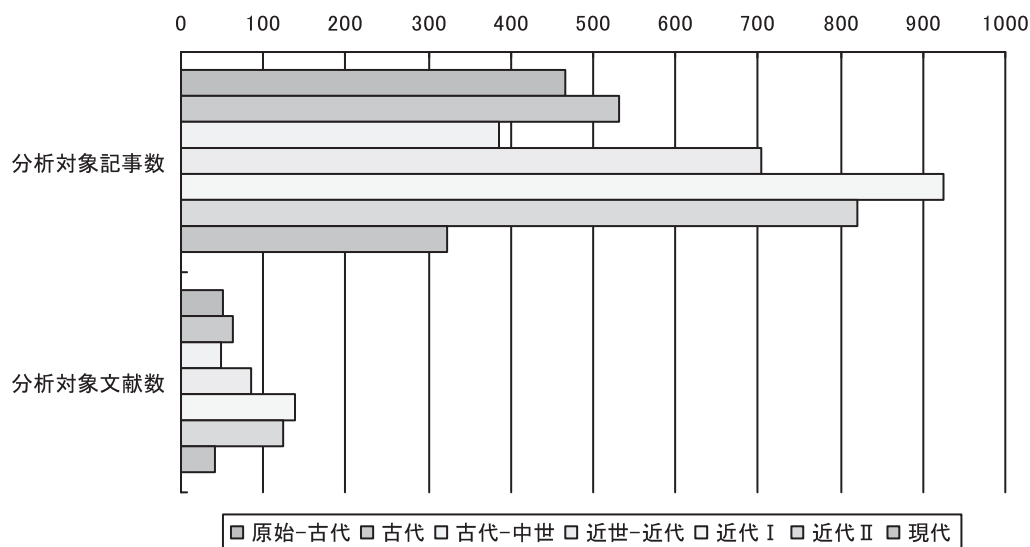


図-2 分析対象記事数, および分析対象文献数
Fig. 2. The total number of articles and books for analysis.

1) 神道の発生以前から成立まで(原始-古代)

神道の最も原始的な形態は「自然と共生した風習・民族」^{30)・31)・32)}ということができるが、この時代における神道以前の神道、つまり自覚される以前の“神道”の根底にあったのは「自然崇拜」³³⁾という共通思念であった。この当時は未だ“神道”という名称自体は登場していない。この日本の自然崇拜の特徴は、崇拜すべき対象と人間の間に対話的關係が存在せず、当初から関心の中に唯一神の存在を含んでいないことであった。つまり、アニミズム理論³⁴⁾で指摘される宗教性とは全く別種の宗教性を持っていたという点で特徴的である。これは元々の理論を生んだキリスト教とも全く異なる種類の宗教的信条である³⁵⁾とされており、ヒエラルキー³⁶⁾の体系に組み込んで説明すること自体が不毛だとも指摘されている。また、神道は本来、形のある礼拝対象を持っておらず³⁷⁾、神社という建築物が創造される以前は、森即ちミヤマ(御山)そのもの³⁸⁾が信仰対象であり、聖地も森そのものであり、この流れの中で後に現れる神社空間も、他の宗教に見る聖地や教会や寺院とはその意味が異なるとされている。なお、仏教や儒教の影響を受ける以前の神道が明らかにされたのは18世紀の本居宣長の復古神道以後³⁹⁾であり、このような共通認識が形成されたのは最近のことだとされている。

またこの時代の空間認識は、それに関わる語彙の解釈から、信仰対象と「自然」が同一なものとして認識されていたことが推測される。「カミ」という日本語は“隠れる”という意味の大昔の言葉である「クム」が変化したもの⁴⁰⁾であり、本来は日本の山がちな風土にひそむ“隠れた精霊”を指して「カミ」と称した。その後、奈良時代に入ってからその「カミ」に漢字を当てて「神」と書くようになった⁴¹⁾。また「一柱・二柱」「一座・二座」という表現を用いて「カミ」を数えていた。「モリ」は「杜」「森」「神社」と表記した。「杜」は、中国では「ト」と発音し、その意味はヤマナシ(野生の梨)という果実、あるいは「塞ぐ」というものであり、「モリ」という発音・読み方はなく、意味的にも日本で言う「森」「神社」を指す言葉ではない^{42)・43)}。

以上の事から、この時代の相互の關係は、「自然」そのものが信仰の対象であり、当時の日本人にとってその空間に対する認識は意識的にも無意識的にも強固なものであったと考えられる。絶対神を持たず、山・森林・樹木・岩などの自然物を崇拜対象としていた事と語彙に含まれた意味から、このことを読み取ることが出来る。これが“神道”の発生であり、神道の発生と「自然」とを切り離して考えるのは不可能な關係性であったと解釈することが出来る。なぜなら、対象そのもの、つまり関心の対象そのものが「自然」であったからである。

2) 仏教伝来から神仏習合まで(古代)

“神道”という言葉が文書上用いられたのは『日本書紀』の第三代用明天皇の即位前紀に記載されたのが最初とされており、この中で天皇の人柄を評して「天皇信仏法尊神道」と記された⁴⁴⁾ことに由来するといわれている。ただし、ここに述べられた“神道”の語意は天皇即位前期だけに限られた用例であり、単に仏法⁴⁵⁾の対語でしかなかった。更に、そこで用いられたのは書紀編纂時の用法であり、記載内容当時の用法ではないという点に注意しなければならない。つまり「仏法」の対語でしかないという事実は、外来の宗教文化と対比してはじめて在来の神祇祭祀を自覚し、それにふさわしい「神道」の名を採用したという前後の事情を示している⁴⁶⁾からである。仏教の伝来が「神道」を意識させたということは、神道という名称の由来からも、その一端が明らかである。仏教が百済から日本へ公伝されたのは538年(若しくは552年)であるが、当時仏教は外来の神と捉えられ、仏教の伝来を契機として、日本固有の

信仰が再認識⁴⁷⁾されるようになったといわれている。

またこの時代の空間認識は、それに関わる語彙から信仰対象と「自然」の関係を窺い知る事が出来る。平安時代までは、ヤシロ（社）とミヤ（宮）は厳密に区別されている反面、逆にヤシロとモリは「杜」と「社」の文字が混用され⁴⁸⁾ていた程その区別が曖昧であった。社（ヤシロ）とは「宮（ミヤ）」とよばれる延喜式で示された 11 社以外のものを指し、「神社（カミノヤシロ）」とも表記された⁴⁹⁾。そしてその空間とは、神を祭るための通常は禁足地とされた空き地であり、それこそが“神社”であった。つまり社殿が建つ場所を指す神社空間や社殿の建物ではなく、自然空間そのものが聖地であり、杜（モリ）即ち神聖な森が社（ヤシロ）に等しい⁵⁰⁾とされていた。その後仏教伝来により仏像という礼拝対象の影響を受けた結果、本来は形のある礼拝対象を持っていなかった神道⁵¹⁾においても神像を作って祀るようになり、それを設置するための施設として社殿を建設した。そのほか祭壇や参列者を風雨から守るための覆い屋根を設けた臨時的施設、更にそれを常設化した施設⁵²⁾、と変化していった。このように神社の初期形態は杜（森）に囲まれた神祭の聖地そのもの、神祭の聖地に臨時的に屋舎を設けたもの、神祭の聖地に常設の社殿を建てたもの、これら三つの様式があった⁵³⁾と指摘されている。更にその後、寺院建築の影響を受けて、しかも独自性を強調する様式を考慮⁵⁴⁾して、神道も神社の空間の中に社殿を作るようになった。これに伴って神観念も社殿に常在して人々を守る神々の信仰へと変化していった。

これらの事から、仏教伝来をきっかけにして神道の空間認識が覚醒され、その結果として建造物としての神社の空間が創造されたことが明らかになった。空間のあり方は自然地从社殿へとその重点が変化した。仏教伝来は神道の空間認識を意識させたが、仏教との対比によって自己を認識していく過程で、「自然」と同義であった神道の空間が徐々に離れていくきっかけとなり、両者の関係が多角化していったと解釈することが出来る。

3) 神仏習合から本地垂迹説の成立まで（古代－中世）

ここまで述べたとおり、仏教伝来以後、神道と仏教は互いに強い影響を及ぼしあうことになったが、双方は敵対することなく併存関係を保って存続した。この状態が神仏習合⁵⁵⁾である。実際の神仏の習合は、理論的というよりも、現象面での神宮寺・鎮守の存在が先行した⁵⁶⁾といわれている。神仏習合が進展した平安中期以降には、神と仏が渾然となった状態で信仰されるようになり、その結果権現や明神といった新たな神格が誕生⁵⁷⁾し、仏教と神道の力を融合した神として人々の人気を集めたといわれている。これらは仏教の影響を受けて発生したものである。このように神仏習合に伴い、日本に元来存在した神々に対する観念は仏教の出現の論理と重なり融合した⁵⁸⁾といわれている。

このような神仏の関係の中から、逆に仏教側は神道からどのように影響を受けていたかという点に着目することにより、日本独特の空間認識と「自然」の位置づけが浮かびあがってくる。この時代の特徴として、平安時代後期には仏教において日本独特の曼荼羅が描かれるようになった点があげられる。この曼荼羅の構図とは、一枚の絵の中で神を描いた周辺に仏を配置するというもの⁵⁹⁾であり、伊勢曼荼羅・熊野曼荼羅などと呼ばれ伊勢・出雲・熊野などに存在する。ここで注目すべき点は、画面の中央に必ず山が描かれ、山が主人公になっていることである。元来インドの仏教徒にとっては、曼荼羅の主人公は神々の姿・仏・菩薩の姿だが、日本においては、本来神々が描かれる場所に自然そのものを描いているのである。そしてその山頂や山麓や山腹に神社や仏殿が描かれていた⁶⁰⁾のである。つまり、元来の仏教には存在しない

表-4 本地垂迹及び反本地垂迹による神道の分類
Table 4. The classification of Shinto by *Honji-suijaku* and anti-*Honji-suijaku*.

分類	
本地垂迹 《仏本神迹》	山王一実神道 [本迹縁起神道・天台神道・日吉神道] 最澄・天海 両部神道 [両部習合神道・真言神道] 空海 法華神道 日蓮宗日澄・妙蓮寺日忠 御流神道 [仁和寺] 立川流神道 三輪流神道 雲伝神道
反本地垂迹 《神本仏迹》	伊勢神道 [度会神道・外宮神道] 吉田神道 [元本宗源神道・卜部神道・唯一神道] 卜部兼俱 吉川神道 [新吉田神道・理学(朱子学)神道] 吉川惟足 垂加神道 [朱子学神道] 山崎闇斎 忌部(斎部)神道 [宋学神道] 忌部正通 安倍神道 [陰陽道] 安倍晴明 復古神道 [純粹神道] 荷田春満・加茂真淵・本居宣長・平田篤胤 伯家神道 [神祇伯家神道・白川神道]

自然物を信仰の中心におくという姿勢は、神道が仏教に影響を与えたことを意味する。ここには自然を通して神の世界・仏の世界に触れようとする特色⁶¹⁾があり、このことは人間と神と自然の間の空間認識が、外来宗教である仏教の影響をしてもなお存在することを示唆するものと考えられる。

また、本覚思想からみた神仏習合と自然の神道との関係^{62)・63)・64)}も注目に値する。本覚とは仏語で『人間に本来等しく備わっている仏の悟り・本性としての悟り』のことであり、本覚思想とは『人は誰でも仏になれるという考え方』をいう。だがこの解釈は日本ではそのまま導入されておらず、日本独自に咀嚼され『万物に仏性がある』つまり『草や木まで成仏できる』と解釈されて広まっている。なお、中期になると神仏習合が理論化されて本地垂迹説が成立した。これは奈良時代に起こった思想で、神は仏が仮に形を変えてこの世に現れたもの^{65)・66)}とする思想である。その発生は平安以前に遡る⁶⁷⁾ともいわれ、鎌倉時代に整備された。しかし垂迹である神と本地である仏・菩薩との対応は必ずしも一定していない。他方では、本地垂迹の逆で仏が仮に形を変えてこの世に現れた神だとする反本地垂迹も存在した。表-4に示すとおり、本地垂迹及び反本地垂迹の考えに基づく神道の分類は多岐に渡り、ここらかも神道と仏教の間に起こった神仏習合の影響を窺い知る事が出来る。更に、真言宗の立場からなされた神道解釈に基づく神仏習合思想である「両部神道⁶⁸⁾」に着目すると、日本の土地は神話によって神の土地、両部神道によって仏の土地であり、日本では土地自体に意味がある⁶⁹⁾と解釈される。その根底には、神道が元々持っていた自然観を壊さずに、仏教が両部神道化したことが指摘され、日本人の自然観の根底を成すものであると解釈される。

以上の事から、神仏習合によって齎された空間認識により、「自然」は、存在としての「自然」から思想としての「自然」へと変化したと考えられる。実在する「自然」の空間を重視す

る傾向は徐々に薄れていくことになったといえる。

4) 神仏習合期から神仏分離令・廃仏毀釈まで (近世—近代)

神道と仏教が併存した神仏習合期は江戸末期まで継続し、これに伴い日本に元来存在した神々に対する観念が仏教の論理と重なり融合した⁷⁰⁾。神と仏は原理的に異なるものであったとしても、日本人の心性と存在感覚においては、それは長い間共通のカテゴリーの中で連続しているものと受け止められてきた。神仏は分離されるものではなく、表裏一体をなし密接不離の関係にあり、時には本地垂迹し、互いに変換しあい、変容しあう間柄であった⁷¹⁾。このような流れの中で、元来の神道の信仰対象であった「自然」に対する人々の意識は薄れていくことになる。信仰の森として大切にされてきた結果の姿として、神社や寺院の周囲には相対的に自然性の高い樹林が存在してきた。しかしその後、境内の木々を財源として利用する動きが活発になりはじめ、江戸時代になるとこの動きは更に活発になった。これは複数の指摘^{72)・73)・74)}によって言われており、それによると近世の地誌類や古絵図を見る限り社殿近傍を除く境内地は大概アカマツ林によって構成された単純な植生であった。境内の枯損木、落葉、柴草などは薪材用として神社経営にとって欠かせない収入源であったからである。

その後、明治元年である1868年に神仏分離令(神仏判然令)が出された。これにより仏教伝来以来継続し続けた神仏習合の思想は分断されて神道と仏教の関係は強制的に分離され、江戸時代まで続いていた神仏習合の思想やそれに影響を受けて形成されてきた文化も影響を受けた。更に一部の神官たちによる徹底した廃仏毀釈⁷⁵⁾が行われて神と仏が明確に区分されたことは、日本人にとっての神が希薄化し、力とリアリティを失うということ⁷⁶⁾を意味したが、その結果、空間としての神社と寺院も明確に分離されるようになった。

また、明治政府が行った処々の政策には、古代志向性と近代西洋文明志向性という相反する指向がみられるが、これによって生じる歪みは、神道の空間認識や「自然」の位置づけに対しても顕著に認められる。神仏分離令はそれ以前の緩やかな変化と異なり、行政的な上からの力で日本人の心性に強制的な変更を強いるもの⁷⁷⁾であった。神仏習合時代に長い時間をかけて培われてきた多神教的な存在感覚を一気に分離させようとするものであったからである。神仏分離令は、神仏二元対立的な思考を持ち込み、日本人が神仏や祖霊に対して抱いていた畏怖や畏敬の念を分離させ、異なるものとして認識させた。

更に、神道国教化政策や国家神道によって神道は国家的な位置づけを得た結果、「神道」という概念には、政府や各宗教のせめぎあいと露骨に反映されることとなり、神社もその影響を直接に被った⁷⁸⁾。それに伴う形で神社内の意識的な保護が始まったのは明治年間だろう⁷⁹⁾という指摘もある。

先に述べたように、神道と仏教の分離は、神社と寺院の区別が明確されたことにもつながった。神仏分離は皇統と国家の功臣を神として祀り、村々の産土社をその底辺に配した神々の体系作りをめざすものであるため、この時期に神社と寺院が明確になった⁸⁰⁾との指摘もある。

日本人の神観、自然観、人間観、存在感覚を大きく歪める形で成立したのが、近代天皇制の元での現人神観⁸¹⁾であった。日本という場所にいる限りいかなる時代においても「神道」のベースは崩れないが、現人神観の下では、神道における空間認識においては「自然」に対する認識は完全に排除されたといえるだろう。認識が排除されるということは、空間としての存在意義を失うということを示し、つまりは神社から「自然」に対する特別な意識が消失したことを意味しているとさえ推察できる。

その一方で「自然」を重要視すべきだという主張も出現してくる。本郷高德はその著書「郷土風景と神社」⁸²⁾の中で、「自然」に関してその価値を述べている。彼の主張の中心は郷土風景を保存することにあり、その対象地として神社が優れていると考えていたと推察できる。本郷にとって神社の「自然」は林学的・生態学的な意味合いが強く、郷土固有の林相と述べていることからそのことが窺える。彼は郷土風景の保存が困難であることを前提に著しているが、このことはつまり、それが困難であることをすでに認めているのであって、言い換えれば、神社の「自然」空間が存在し難い状況にあることを指しているのではないだろうか。

もうひとつ、別の視点からも「自然」の重要性が主張されていた。つまり日本における神を明らかにする過程で意識されてきた「自然」である。これに関わる人物として、柳田国男と折口信夫は互いに共通した問いを抱えながらも異なる視点で解を求めた。二人は共に、神はどこかに常住常在するものではなく、人間による祭りの機会を定めて依り来るものであり、祭りが終わればまた還り立つもの、そしてその神が依り来るにはそれを迎えまつる装置が不可欠である⁸³⁾という点では共通していた。だが折口が依代論を展開して人工的象徴的な装置を注視していたのに対し、柳田の神樹論は天然の樹木を神の宿る木と見立て、一定の象徴物ではなく神は自然の樹木に招かれ宿るもの⁸⁴⁾と考えていた。柳田は神を明らかにするなかで神道に対する「自然」の位置づけを明らかにしたのである。なお、柳田は日本の村落で最も一般的な村ごとの氏神は本来的なものではなく、歴史的な変化の結果⁸⁵⁾であるとし、氏神を「村氏神」「屋敷氏神」「一門氏神」の三種類に分けて論じた⁸⁶⁾。氏神とは元来は氏ごとに一つあるべき神であったが、古代中世と永い歴史の展開の中で大きく多様な変化があり、その結果「村氏神」「屋敷氏神」「一門氏神」の三つのタイプが見られるようになったとした。

以上の事から、信仰の森として保護・保存されてきた自然性の高い樹林が、積極的に利用されはじめた動きの裏には、元来の神道の信仰対象であった「自然」に対する人々の意識が薄れ、財源つまり利用の対象として認識されてきたことが指摘できる。

5) 公園としての位置付け(近代)

東京市区改正委員会の公園計画の特徴は、神社を基盤とする公園が約半数を占めていた事である。事実、1889年の公園改良調査臨時委員による調査において、公園設置対象地の約半数は神社寺院の境内地を基盤とする場所であった。1891年の最終報告書では、社寺境内地に立地する公園は建造物や境内地を公園敷地と分離する方向で整備指針が立てられていた⁸⁷⁾。明治初期の公園設置以降、市区改正の初期段階に至るまでの新設公園は、その大半が神社境内を基盤としており、日枝神社の公園化以降、公園開設は殆ど神社境内地で行われていた。なお、明治国家体制の確立と共に神社・神社境内地は国家的な意味⁸⁸⁾を形成する空間として位置づけられたという側面からは、神社境内地への公園設置は「国家神道」の祭祀としての社会的地位を与えられながらも経営基盤が弱い神社の境内地保存対策の側面を有していたとも解釈されている。

公園敷地の対象となる神社の空間は建造物が立っていない場所、つまり社殿以外の空間である「自然」の空間であった。このとき「自然」はそれ自体に意味を持つ空間として認識されていないと考えられる。だからこそその空間を公園地として神社空間から分断することが出来たのである。そう解釈すると、行政機関のみならず神道に従事する者にとっても当時の神道における「自然」の位置づけが希薄化していたといえるのではないだろうか。

また、公園行政の立場からも同様の傾向が窺える。当初の公園創設が目指す理念の中に「自

然」に対する概念は含まれていなかった。公園は、主に欧米からの概念輸入であったため、神社や寺院が存在しない欧米の公園緑地理論を用いている以上、意識の中心であるはずもない。ただ、その場が神社であるという事実を前にしてその対処や方針を打ち出していたに過ぎないのであると考えられる。

日本における近代都市公園は、1889年の東京市区改正では、衛生を理念上の目的としながらも、計画の大半を神社境内地が占めるという理念と実体の分離の上に成立した⁸⁹⁾。1903年の市区改正のこの時の公園計画の変更の時点においても神社境内地への立地方針は踏襲されていた。だが、当然のことながら神社の空間における神道の精神を無視することは出来ない。神社境内地への公園計画の審議の際に、「公園トシテ勝手ニ設備シ得ルモノニアラズ」と管理の徹底によって神社境内地の宗教性は確保されるとする内務省の方針が確認され⁹⁰⁾、公園と社寺境内地の分離方針が明確化し始めた。空間認識の変化を導いた社会的動向において、1897年代以降、神社行政においても神社への財政支援制度の整備に向けた議論^{91)・92)・93)・94)}が本格化し、神社境内地は国民統合の空間としての位置を確立していった。1903年の市区改正の設計変更の審議の最終段階で、既に1895年に出されていた公園と神社境内地の敷地内における分離の訓令を踏襲する訓令が東京市参事会に発せられるなど、神社境内地と公園の分離は実質化していった。またこの他にも、神社・寺院の空間と公園に関しては、数多くの指摘がなされている。ここにきて「神道」と「神社空間」は変遷を異にするものであり、同一視するものではないという見方も考えられる。なぜなら宗教としての神道が受けた近代化に対する最初のエポックは確かに江戸時代から明治時代への移行期であったが、一方で神道における空間認識の近代化ともいうべき転換期は、既にそれより以前に起こってしまっているからである。つまり神社空間の「自然」「神」という空間認識から「遊観地」などへの認識の多様化は明治期以前にその萌芽を向かっており、これが初期のエポックなのではないかと解釈できる。

6) 神社合祀期から緑地概念の誕生まで(近代)

神社合祀政策により、伝統社会に融合して各地で独自の発展を遂げてきた神社空間は、急速な規模と速度で変貌を遂げ、村の共同体に長く親しまれてきた神社や神祠が激減した。神社合併令によって全国で半分近くの森が潰され、神社は全体として国家神道の枠組みのなかに組み入れられた⁹⁵⁾。このような国家的な動きの中で、意識の外に追いやられつつあった神社の「背景」であった社叢に目を向けた南方熊楠や白井光太郎の功績は評価に値すると考えられる。しかし、このような活動はあったものの、結果としては日本の国土に偏在していた所謂神懸空間がこの事業によって次々に抹消されていった。さらに、神社合祀による神社空間の変化は、国家的シンボルとしての神社創建の動きと平行⁹⁶⁾していた。

近代以前、寺院や神社は聖なる空間であり、神や仏といった信仰を仲立ちとして、人々は空間に接していたといえる。しかし新たな認識の枠組によって、人々と宗教空間の結びつきは、全く違うものになった。人々が空間から何らかの神聖な意味を受け取ったり、あるいは空間に神聖な意味を与えたりする営みは、ここで途切れることになった。すなわち、かつての宗教空間は、ハコとしての建築やモノとしての美術に分断され、空間と神聖の一体性に根本的な改変が加えられた⁹⁷⁾。また、今日見られるような、所謂「鎮守の森」が形成されたのは案外新しいだろうという指摘も注目し値する。薪炭財としての利用を行わなくなって植生遷移が進んだ結果の姿が今日の鎮守の森の姿であるという解釈もある。

一方で、初期の公園の設立には「自然」に対する配慮や概念によって設けられたものでは無

く、東京市が郊外公園構想を樹立しこれを実現させた頃には、「緑地」という言葉はなかった。但し概念としては、1885年の東京市区改正審査会では、公園について「人口稠密ノ都府ニ園林及空地ヲ要スルハ其因由一ナラズト雖モ云云」と審議されている。さらに「園林空地ヲ市府ノ内外ニ設置シテ常ニ無価ノ清風ヲ居民ニ供給スルノ他求ムベキノ道ナシ」「欧州四大府ニ現存スル空地及ビ公園ノ比例ヲ掲ゲテ其参照ニ供」としている。前島⁹⁸⁾・⁹⁹⁾が指摘するように、公園とは区別をおいて空き地というものを別に考えており、日本における緑地概念の最も早い発想として位置づけることが出来る。『(前略) 佐藤博士は更に、「自由空地と緑地」について都市問題の大家池田宏氏、農学博士大屋霊城氏、林学博士上原敬二氏、大阪市長関一博士等の学説を克明にあげた後、「緑地」を概念的に明確化したのは、都市計画専攻の飯沼一省、造園学者北村徳太郎の両氏であろうとしている。そして「緑地」という言葉の初見は、大正十三年七月「都市公論」誌七巻七号にのせられた内務省都市計画局私案として発表された「公園計画基本案」において都市公園の説明の中に出たものであるとし、この用語は、すべての公園を含むと同時に、他の緑の土地を含むように考えられる、としている。

「緑地」の定義や、分類は委員会としては八年十二月二十二日に一応の決定をした。

- ・ 緑地トハ其ノ本来ノ目的ガ空地ニシテ宅地・商工業用地及頻繁ナル
- ・ 交通用地ノ如ク建蔽セラレザル永続的ノモノヲ謂フ

この「空地」とは、土地たと水面たとを問わず、総て永続的に空地である事を要し、分譲予定地、商工業地予想地などは、たとえ未建築地であっても緑地ではないのである。「緑地」の定義は以上のとおり説明されているが、この言葉自体当時としては専門家以外はほとんど周知していなかったの、こうした定義を附したのである。』

『「緑地の基準」と「計画案の作製」という東京緑地計画協議会がきめた内容は、要すれば新しい地域計画を導入した「緑地」を含めて既成市街地の公園をも包含していることがわかり、わが国においてはじめて試みられた市域内外の公園緑地設置の指針を示めたものといえる。

東京緑地計画協議会は、結果的には大正十三年以来研究されてきた公園設計標準を、あらたに地方計画としてとり入れた「緑地」とあわせて総合的に都市内外の公園緑地計画の指針をうち出したものであるとみてよいであろう。』

『東京において大緑地が都市計画および事業決定を見たときには、内務省はすでに緑地の都市計画法における法文化を決定していたのである。すなわち昭和十五年四月一日都市計画法(旧)は改正されて、第十一条の二、第十六条は次のように「緑地」の文字を加えた。(略) 法律として「緑地」が誕生したことはきわめて注目すべきことであることはいうまでもないが、この「緑地」は、東京緑地計画協議会において十分検討されつくした地域性の「緑地」の定義とは異なるもので、都市公園同様に公共営造物であることが最も重要なことであった。では、公園と緑地とのちがいはどうなのか、ということは、今日でさえ明確な解答が出ていない。まったくおなじようであるようにも考ええられ、そこに多少ニュアンスのちがいがあるようにもとれる。ただ簡単に説明すれば、都市公園は都市民の保健休養に端的直接に役立てるものであるから施設本位となるのに対して、緑地は、公園の機能をももつ上に更に都市防衛、都市の過大化防止策等のかねた広い意味をもち、従って面積もかなり大きく、密度の高い施設等は必要とせず、農耕地、疎林、水面、草地など自然のままの形態をのこしつつ利用に供される営造物、ということになる。』

この時代における神道の空間認識と「自然」の関係の特徴は、「自然」に対する位置づけの

希薄化と空間自体の減少が促進したこと、並びに従来の結びつきに依らない新たな発想で捉える概念が誕生した点を指摘することが注目に値する。

7) 現代的な問題と緑地の解釈の拡充 (現代)

現代では実態としての神社の空間のみならず行政機関や個人個人の意識の中でも、神社における「自然」の位置づけや考慮が希薄になっていると考えられる。神道は日本民族の文化そのものであって、それを宗教と感じさせないところに神道の特質がある¹⁰⁰⁾という側面があるが、さりとて住民から寄せられる苦情に対しては、神社における樹木、つまり神道における「自然」の意味が全く認識されていないことを裏付けるものとして重要視する必要がある。そしてさらに問題なのは、神社側がその苦情を安易に応じてしまうことである。このことは、一般の日本人にとって無意識なのと同様、神職者においても神道における「自然」に対して無自覚であることを暗示するものとして注視する必要がある。例えば、全国の神社の総括組織である神社本庁には、毎年全国から6,000件程の境内の縮小・移転・消滅の報告がある。その内訳は民間による建築物だけではなく、約60%が都道府県等の公共団体からの要請や、付近住民からの苦情によるもの¹⁰¹⁾であるという。

しかし一方で、現代的な価値付けを神社に対して行うならば、緑地という視点を取り入れることは神道の元来的な意味に照らし合わせても理に適っていると考えられる。緑地は自然の復活、アメニティの向上、都市環境の改善の中心的媒体として多いに注目されており、現代の一つのキーワードとしての位置を獲得するに至っている。だが多様な作用を我々人間に与える反面、人間活動により様々な影響を被っている。特に人口や産業が集中する都市においてそれは顕著に見られ、資源やエネルギーを大量に消費する代償に環境への負荷の発生源となっている。今日の都市は自然環境とその健全なメカニズムを失い、豊かな生活の基盤となるべき環境を喪失しているといえる。緑地に求められる機能に対し神社の「自然」がそれに応え得る空間であるならば、それを積極的に評価し活用することには意義があると考えられる。

2.3.2. 日本人の「自然」に対する空間の認識および西欧との比較

次に日本人の「自然」に対する空間認識を西欧との比較によって考えてみたい。「自然」と“nature”の言葉から日本人の「自然」に対する空間認識を求めた結果、明治期以前には空間から人間だけを切り離れた残りの部分をさす表現は日本には存在せず、元来日本人はそのような空間の捉え方をしてこなかったことが示された。言い換えれば、自然は客体化するものではなく、自身側にある存在として認識していたと解釈出来る。その後明治期に持ち込まれた“nature”の概念とその訳語としての“自然”の用法が普及し、一般化して今に至っているのであった。また自然に関する記述は、哲学・文学・エッセーなど、多岐に渡りその数も多いが、それらの中では自然とは何かが考究され、自然が賛美され、自然は価値あるもの、必要なものとする考えが一貫して示されてきた¹⁰²⁾。しかし、自然そのものの意味や自然と人間との関係を実証的、あるいは科学的に理解しようという試みがなされるようになったのは比較的最近¹⁰³⁾のことである。また今日使っているような自然を表す概念は古語には存在せず、古代の日本語には“自然”という言葉は無かった¹⁰⁴⁾といわれている。

また我々日本人が想像する自然は絶対的なものではなく、宗教により民族により様々な異なる¹⁰⁵⁾という点も留意すべき部分である。自然を具体的な対象物として捉える時にはそれが指し示す対象の差は顕著ではないと思われるが、その自然に対するイメージの根底にある観念には差

異が認められると考えられる。翻訳論研究の柳父章は、“自然”“nature”に関して、元々意味の異なる二つの概念の狭間で“自然”という言葉が多義的に使われてきた点を指摘している。その論とは、『自然を作用として認識する時代から、客観的な認識対象として捉える時代への転換。日本では明治時代が転換期。自然科学の知識と技術の導入を積極的に図り、自然をnatureの翻訳語として採用』『日本語の“自然”という言葉には、伝来の日本語「自然」との意味と、西欧語(nature)という言葉の意味とが混在。共通点は、「人為」と対立していること、相違点は“自然”はある状態であり、その輪郭を明確に捉えにくい場合があるが、“nature”は実態・実質的なものを指しその輪郭が明確』(106)・(107)というものであり、今までこの論理は数多くの場面でも参考されている(108)・(109)・(110)。

また“自然”と“nature”の語から日本人の自然観を次のように整理したものもある(111)・(112)。『キリスト教の神のような自己を超越した存在を“nature”が容認するのに対して、“自然”にはそれを超えた存在は無く、“自然”の営みそのものが永遠性をもつと考えられてきた。“nature”が人為を不可欠の存在として認めるのに対して、“自然”は人為そのものを包み込みその存在を否定する。』『日本人は“自然”に対する超越的視座を持たない。“nature”が知の対象として考えられてきたのに対して、伝統的“自然”とは、対象化できない働きであり理屈では捕えられないものとされてきた。そのために、強烈な意識の下で自然そのものというものが考えられる。』

これらの事から“nature”という概念の訳語として“自然”という語が充てられ、それを「しぜん」と発音するのが定着したのは明治以後であったといえることができる。そして“nature”と同義語の、対象物としての“自然”という概念が持ち込まれる以前の日本人にとっては、自然は客体化するものではなく、自身側にある存在であったとも解釈出来る。つまり世界から人間だけを切り離れた残りの部分をさす言葉は無かったのであり、そのような世界の捉え方をしなかったということでもあるだろう。そしてこのこと自体が、日本人の自然に対する空間の認識なのではないかとも推測することができる。従ってこのような考え方は有史以前から引き継がれ、歴史の文脈の中で少しずつ形成された日本人固有の自然観であったと解釈できる。

なお、“自然”が現代的意味の自然として認識されたのが明治時代以降だとすれば、自然観に関する初期の書籍として1947年に富永三郎によって著された「宗教的自然観の展開」¹¹³⁾は注目に値する。この中で著者は『この小論は、我々の祖先の精神生活の内に自然が、殆ど宗教に於けるそれにも等しい一種の救済者としての働きをなして来た事に注目し、この独特の、恐らく最も日本的と呼ぶことを許されるであらう心境の由来と展開とを具体的に跡付けしてみようとする拙い企である。而して吾人は何處迄もこれを日本人の宗教的人生観の問題として、即ち日本史創始の中心的主題の一面として把握しようとするものであって、日本人の自然観の諸相とその變遷とを概説しようとするのでないことを予め十分御承知願っておきたい¹¹⁴⁾。』と断ってはいるが、人と自然との関係に明確な境界線を引けない点からも日本人の自然観と宗教的人生観に影響を与えており(若しくは与えられており)、ここから昭和初期までの自然観の一部を鑑みることができると考えられる。

次に、自然(しぜん)と自然(じねん)の言葉からみた日本人の「自然」に対する空間認識に着目すると、“自然”という言葉自体は中国由来のもので存在していたが、現代のように「シゼン」とは発音せず「ジネン」と発音するという点、“自然”は「おのずからしかる」つまり本来的にそうであるごとくそうであるものという意味の老子の語¹¹⁵⁾、「おのづから」な状態を意味する形容詞¹¹⁶⁾、「おのずからそうなる」という意味の副詞か動詞¹¹⁷⁾であったということにも現

代のものとは異なることがみてとれる。つまり明治以前には日本語の中に「自然」に相当する名詞はなかったということである。名詞でないというのは、認知の対象として認められていなかったということを示唆している。もともと「自然（じねん）」とは、老荘哲学における基本概念¹¹⁸⁾であり仏教語ではない。このことは「自然」に相当する語が仏教サンスクリットに存在しない¹¹⁹⁾という事実からも説明されている。老荘哲学において、「自然」という語を用いて表現したのは、「人間の営為如何に関わらず世界が究極の状態にある」という概念である。これは、「自然」（つまり「自ずから然り」）、世界は人間の営為を離れて（つまり「無為」にして）完結しているということを表現した。

仏典が漢訳される時期に、「自然（じねん）」という言葉は比較的早い段階で中国仏教に取り入れられ、「法爾¹²⁰⁾・法性」（dharmata¹²¹⁾）の同義語として用いられるようになった。つまり大乘仏教に取り入れられた「自然（じねん）」の概念は、自然界とは無関係¹²²⁾だと考えてよい。そもそも仏教において世界から人間を切り離れた「自然（しぜん）」を想定し、あるいはそれを問題にするという事は大きな関心ではなかった¹²³⁾といわれている。したがって、仏教で所謂自然界を思索の直接の対象とするようなことは無かったといわれている。

ところが日本の仏教においては、上記した世界仏教の感覚とは異なる概念が生じてくる。世界仏教では自然界を思索の直接の対象とするようなことは無かったが、日本仏教では、山川草木の自然界が思索の対象として扱われるようになる。徳永¹²⁴⁾によれば日本仏教における「自然」は表-5の通り道元の例を用いて次のように説明される。

『こういう見方の根底には自然が人間を威圧し、人間に匹敵するものではなく、人間をつつみ、はぐぐみ、ついには人間といったいであるという日本人独自の自然観があることは間違いない。そして、その行き着くところが、日本天台の口伝法門が説く「草木不成仏説」であるといえよう。それは「草木国土悉皆成仏」をさらにすすめて、草木国土はそのまま仏なのであるから、その上に成仏する必要はなく、したがって「不成仏」だというのである。日本天台口伝の本覚法門には、日本人の自然観から生じた際立った特徴があった。これがアニミズムと混同されやすい危険性があることはよく指摘されるが、なおそこには現代世界の緊要の課題であるエコロジーの推進には不可欠の要素を含んでいることは疑いを容れない。』

ここから推察するに、「自然」に対する意識の差が同じ仏教でありながら世界仏教と日本仏教で生じている要因には「神道」の存在があるといえるのではないかと考えられる。つまり、日本仏教の思想は神仏習合によって醸成されたものであり、また元々世界仏教は想定されていなかった自然に対する概念が日本仏教においては生じているという事実には、世界仏教と日本仏教との差、つまり「神道の有無」が存在するからである。

表-5 日本仏教における「自然」の見方
Table 5. The view of [Shizen] for Japanese Buddhism.

見方
山水即ち自然界を究極的実在としてみなしている
自然界を究極的なさとの権現とみなしている
さとの権現としての自然界を概念的に対象化することを否定している
自然界を材料にして「無為自然」の境界は人間の概念によっては捉えられないことを語る
自然界は仏陀の正覚の権現である

ここまで、日本において神道における「自然」の意義とそれが反映された空間として神社があることを述べてきた。この『信仰・「自然」・空間』という三者の関係は、ここから述べるとおり西欧のそれと比較することでより明確になる。

西欧において、教会は通常では「自然」の中に立地したり、「自然」を背後にかかえる形で立地するものではない。しかし、近代化以前には東西の生活文化には類似点が多かった¹²⁵⁾とされている。キリスト教の影響を受ける以前、ヨーロッパの先住民であるケルト人の信仰は、山川草木に霊が宿っていることを信じ¹²⁶⁾、森に棲む神々を畏敬する森の宗教を営んでいた¹²⁷⁾のであって、神々がメルヘンなどという雰囲気や齋すとされてきた¹²⁸⁾事が指摘されている。また古代ゲルマン人も、木を神木として¹²⁹⁾信仰対象としていた歴史がある。タキトゥスの「ゲルマニア」によると『彼らは垣根をもって神を取り囲み、あるいは人間の容貌のいかなるかたちにも似せたりしないものをもって、天上の神々の偉大にかなう所以であると考えている。彼らは森や林を神に捧げ……』『かつて斧鉞を蒙らざる聖林があり、ここに神に捧げられた小車があって、布をもって覆われ、ただ一人の司祭にのみ、これに触れることが許されている』『最後にかの司祭は、人間との交渉に倦み給える女神を、森の神殿に送りかえす』と記されている¹³⁰⁾。古ゲルマン信仰においては、神の住まいである聖所は、人間の居住空間を離れて変えるべき森のなかにあるべきだという自然神的側面をそこにみることができ、古ゲルマンの聖所は、カトリック教会における聖所のあり方とは異なるものであったことが知られる。

また、東西の森林観における自然に対する恐れという観点の分析によると、森林がまだ人を寄せ付けなかった時代には、世界のどの地域でもほぼ例外なく自然や森林は恐れの対象であった。それが原始的な宗教心を育ててきたことも否定できない。例えば、ドイツの **Schwarz Wald** も森の色彩から名づけられのではなく、果てしなく続く恐ろしく深い森に対してつけられた名前だと指摘されている¹³¹⁾。つまり「黒い森」ではなく「暗黒の森」であり、森林への恐れや崇敬の念が存在したことが示唆される。

従ってキリスト教伝来以前のケルトやゲルマンにおける『信仰・「自然」・空間』という三者の関係は、日本のそれと近いものがあつたと解釈することが出来る。

このような状況の上に成り立っていた関係性が改変されたのは、キリスト教の強烈的な布教態勢が原因であることは間違いない。キリスト教の宣教師は、その土地で信仰対象とされていた神木を人々の前で伐採し、「罰が当たらないからキリスト教の神のほうが強い」と誇示¹³²⁾するようなパフォーマンスを行っていた。上記は「神」が自然神に勝るということを示すものであり、このような行動にみられる人間のほうが自然物に勝るのだという態度は、キリスト教にとって「自然」は対立する存在である事を示唆する。結局キリスト教の普及の結果、教会は木を全部切り払って建てるべきものになり、現在の教会の雰囲気が形作られていった。

キリスト教徒にとって森は聖地の反対の概念で捉えるべきものであった。キリスト教に改変された信仰の目を通して森林等の「自然」を考えると、以前までは信仰の対象であったはずの空間が、邪悪な魔物や恐ろしい野獣が棲む異界と化し、自然や森林は「神の栄光の及ばぬ悪魔の異界¹³³⁾」と恐れるべき空間と捉えられるようになった。このような負の空間としてのイメージを森林に与え、これと対比することによって教会が支配する都市や農村が神聖な世界¹³⁴⁾を構成しているということを啓蒙したのである。このことについては、ロバート・ハリスン(1992)¹³⁵⁾などに詳しい。そこでは西欧において森林がいかにかオース的な負のイメージを帯びてきたかを、古代ギリシャ・ローマの時代から近代に至るまでの西欧文明・文学・思想・芸術にわたって論じている。

キリスト教的観念に支えられた人々における自然に対する空間認識では、ありのままの状態の「自然」を聖地とみなすことは不可能であるばかりか、逆に「自然」を切り開き、教会を建設し、その周囲に人工的な庭園を配置することでその空間を「超」自然的な空間と改変することが重要であった。教会自体の広壮さや雄大さに重点を置く姿勢も同様な理由として理解できる。こうすることで神が「自然」を支配する、ということを顕示することが出来たからである。

同様に、人間の居住空間と教会との距離にもその特徴を読み取ることが出来る。西欧においては教会と居住空間との間には中間的領域¹³⁶⁾ともいうべき空間的距離が存在せず、カトリックの聖地と居住空間が一つの同心円の構造¹³⁷⁾であるというものである。これは図-3に示すように、内円に聖地が位置し外円に居住空間があるが内円と外円のあいだに自然的要素が介在せず、自然は外円よりもう一つ大きな外円をなしているという関係であると解釈される。人間の居住空間の中で直接的に人間を支配するという意識のもとでは「自然」は不必要である。ここではむしろ『信仰・「自然」・空間』という三者の関係ではなく『信仰・空間』という二者の関係といったほうが適切であろう。

それに対して、神道の聖地と居住空間は互いに離れた関係にある。いわば二心円の構造になっているのである。たとえ聖地が居住空間の近くにあるときもそのあいだに森という自然が介在する。その場合、神社の周辺には木々が繁った空間が設置された。

以上の事から、西欧においてケルトやゲルマンにおける『信仰・「自然」・空間』という三位一体であった三者の関係が、キリスト教伝来以後では『「自然」⇔信仰・空間』という対立関係もしくは『信仰・空間』という二者の関係に変化したこと、そして日本においては現在においても空間に対する人々の認識は意識的にも無意識的にも存続している事を指摘できる。

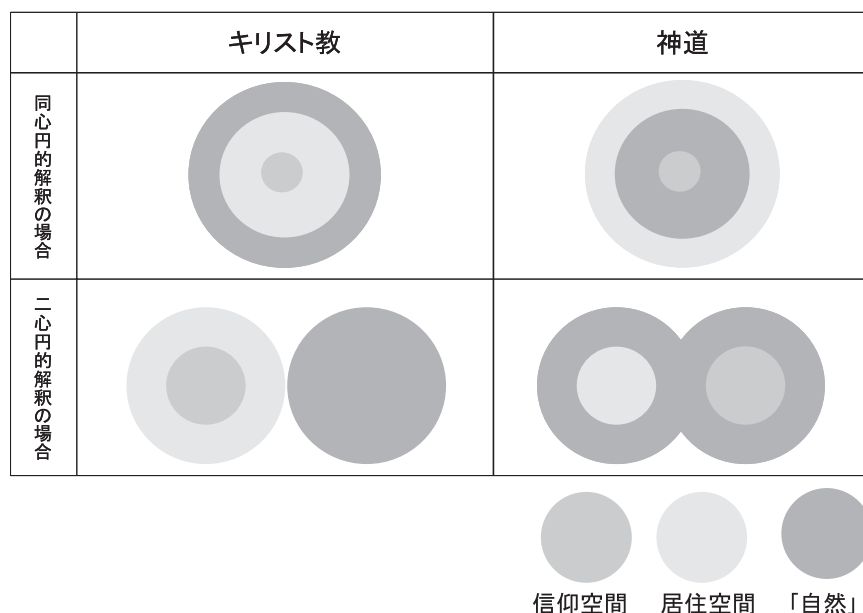


図-3 信仰・「自然」・空間 の関係(谷泰(1997)を元に改変)
Fig. 3. Relations between faith, [Shizen (nature)] and space.

2.4. 結論

本章の結論は以下の通りである。

まず、神道の空間認識における「自然」の位置づけの変遷として以下のことを論じた。初期である神道の発生以前から成立までにおける神道の空間認識と「自然」の関係の特徴は、信仰の対象そのものとして直接的関係の空間でありながら客体的でない事であった。それに続く仏教伝来から神仏習合までにおける両者の関係は、「自然」そのものを神道の空間とした関係が崩れはじめた事が特徴的であった。また、神仏習合から本地垂迹説の成立までにおける関係の特徴は、存在としての「自然」から思想としての「自然」へと変化したことであった。その後、近世から近代にかけて神仏習合期から神仏分離令・廃仏毀釈までにおける関係の特徴は、元来の神道の信仰対象であった「自然」に対する人々の意識が薄れ、利用の対象として「自然」が認識されてきたことが示唆された。そして近代に入り公園の出現が見られる時期になると、神道の空間認識と「自然」の関係は、公園開設にあたって神社の敷地を対象地に指定した背景として神社をそれ自体が「自然」としての意味を持つ空間として認識されていないことが示唆されたが、その後の神社合祀期以降の両者の関係において、「自然」に対する位置づけの希薄化と空間自体の減少が促進したこと、並びに従来の結びつきに依らない新たな発想で捉える概念の誕生などが認められた。そして現代における神道の空間認識との関係の特徴は、元来の「自然」の解釈に対する意識が希薄化する一方で、今日的な問題に対する「緑地」の解釈の拡充により、現代的な価値観によって扱われる空間と成り得る事が特徴として挙げられた。

また、日本人の「自然」に対する空間認識の位置づけとして以下のことを論じた。“自然”と“nature”の言葉から日本人の「自然」に対する空間認識を求めた結果、明治期以前には空間から人間だけを切り離れた残りの部分をさす言葉は日本には無く、元来日本人はそのような空間の捉え方をしてこなかったことが推測された。言い換えれば、自然は客体化するものではなく、自身側にある存在として認識していたと解釈出来た。そして明治期に持ち込まれた“nature”の概念とその訳語としての“自然”の用法が普及し、一般化して今に至ることが明らかになった。次に自然(しぜん)と自然(じねん)の言葉からみた日本人の「自然」に対する空間認識を求めた結果、江戸以前は“自然”「シゼン」とは発音せず「ジネン」と発音する事、「おのずからそうなる」という意味の副詞・動詞として扱われており、現代のものとは異なっていた。つまり明治以前には日本語の中に“自然”に相当する名詞はなく、対象物として認識していなかったということを示唆している。だがその反面、世界仏教では自然界を思索の直接の対象とするようなことは無かったが、日本仏教では、山川草木の自然界が思索の対象として扱われていた。

また西欧との比較によって日本の自然に対する空間認識の特徴として、絶対神を持たず山・森林・樹木・岩などの自然物を崇拜対象としていたことを指摘した。信仰の対象そのもの、つまり関心の対象そのものが「自然」であった。「神道」の発生であり、神道の発生と「自然」は切り離して考える事など不可能な関係性であった。西欧においてキリスト教伝来以前のケルトやゲルマンにおける『信仰・「自然」・空間』という三位一体であった三者の関係が、伝来以後では『「自然」⇔信仰・空間』という対立関係もしくは『信仰・空間』という二者の関係に変化したのが、日本においては『信仰・「自然」・空間』という関係が、現在でも空間に対する人々の認識として意識的にも無意識的にも存続していることを指摘した。

第3章 類義語の比較による“神社の屋外空間”に対する空間概念の明確化

3.1. 本章の目的

神社に関わる空間に共通する概念やその背景を明確にする事は、言葉の意味や意義を明らかにし基礎的な知見を求める上で重要となる。また、同一の空間に対して複数の言葉が用いられる原因とその背景にある意図を明らかにする作業は、神社の空間が時代変遷の中でどのように位置づけられてきたのかを明らかにする上で有効だと考えられる。本章はこのような観点に基づいて論じたものである。

従って本章では、“神社の屋外空間”を指して用いられる「社叢」「鎮守の森」「社寺林」といった類義語を比較して各々の言葉の意味や意義を分析することにより、同一の空間に対して複数の言葉が用いられる原因とその背景にある意図を明らかにし、神社のオープンスペースに対する緑地の空間概念の差異と特徴を明らかにすることを目的として研究を行った。

3.2. 本章の研究方法

3.2.1. 研究対象

論文・報告書・一般出版物中において“神社の屋外空間”を指して用いられた語彙（例えば「神社林」「鎮守の森」「社寺林」「社寺境内林」「社叢」「境内樹林」「境内林」「鎮守の社」「社」等）の内、出現頻度上位2種であった「鎮守の森」「社寺林」の二語を選択し「社叢」と比較する語として分析対象とした。語彙自体の使用の変遷を明らかにするための書籍・論文出現頻度に関する分析と、機械的処理では現れない部分を明らかにする語彙が想定する対象を広く蒐集分析する語彙の概念に関する分析を組み合わせることによって、量的側面と質的側面の双方から実態を明らかにした。

類義語の出現頻度を分析することは、経年的な動向と相互関係を明らかにすることが出来るという利点がある。しかしその反面、内面的な部分や概念の動向が明らかになり難いという部分での限界がある。そのため、後者の分析は前者の数値分析処理の規定に含まれにくい部分における語彙が想定する空間概念と意味を明らかにする方法として行った。

3.2.2. 書籍・論文出現頻度に関する分析方法

書籍・論文出現頻度分析の対象は、学術論文・公共機関発行報告書・一般書籍のうち、題目に「社叢」「鎮守」「社寺」を含むものとした。分析に用いる論文を抽出するための書誌検索は、NDL-OPAC (National Diet Library Online Public Access Catalog) 及びFELIX (Front End of Library Information eXpansion) を使用した。各システムの詳細を表-6に示した。これらのシステムで題目を検索・抽出することが出来る。NDL-OPAC で一般書籍及び公共機関発行報告書を、FELIX で学術雑誌を選出した。

選出された「鎮守」中の「鎮守の森」, 「社寺」中の「社寺林」(「社寺境内林」含む), 「社叢」を選出し、各々の語彙総数中の出現頻度の変遷を求めた。1947年以前はNDL-OPAC, 1948年以降はNDL-OPACとFELIXの合計数が分析対象となった。

まず、書籍・論文出現頻度に関する分析として選出された「社叢」, 「鎮守」, 「社寺」の出現数を年次別にグラフ化し、それらの出現頻度の変遷を求めた。

表-6 使用した検索システムの特徴
Table 6. The features of the search system.

和図書検索	
組織	国立国会図書館
website	http://www.ndl.go.jp/index.html
特徴	我国唯一の納本図書館として国内で刊行されるすべての出版物を収集
名称	NDL-OPAC (National Diet Library Online Public Access Catalog)
website	http://opac.ndl.go.jp/index.html
所蔵内容	図書、雑誌新聞、電子資料、和古書・漢籍、博士論文、地図、音楽録音・映像資料、 蘆原コレクション
収集期間	1868 (和図書) - 現在
学術雑誌検索	
組織	東京大学 情報基盤センター 電子図書館部門
website	http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/
特徴	学術情報の電子化・発信の提供及び研究開発
名称	FELIX (Front End of Library Information eXpansion)
website	http://felix.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/cgi/MetDefault.exe?DEF_HTML=META_NML_SEARCH.def
所蔵内容	学術雑誌論文の目次情報データベース (雑誌記事索引, SwetScan, PCI) 電子ジャーナル・・・約3,000誌の論文
収集期間	1948-現在 (和文学術雑誌)

3.2.3. 語彙の概念に関する分析方法

次に、語彙の概念に関する分析としてまず、表-7に示したように既往の分類¹³⁸⁾⁻¹⁴⁷⁾で挙げられている項目に習い本研究で用いる緑地の機能の項目名を定めた。次いで分析対象文献からその定義となる部分またはそれが存在しない場合には説明部分を抜き出し、上記で定めた緑地の機能に該当する項目に従い分類した。次に、各々の文献が対象としている空間の範囲を表-8の項目を設定しそれに従い分類した。なおこの分類では該当項目が一点だけとは限らないため、該当項目の重複を認めている。以上に述べた書籍・論文出現頻度に関する分析と語彙の概念に関する分析を組み合わせることによって、量的側面と質的側面の双方から実態を明らかにした。

3.3. 結果

3.3.1. 書籍・論文出現頻度に関する分析

検索の結果、分析対象となる「社叢」「鎮守」「社寺」を題目に含む文献数は表-9に示す数が該当し、それらの書籍・論文数の出現数と頻度の変遷は図-4に示したとおりであった。ただし社寺林には社寺境内林を含み、社叢には社叢林を含む。またグラフのy軸の幅は各々異なっている。

1) 社叢

「社叢」を題目に含む書籍・論文総数は21件であり、初出は1976年「熱田神宮社叢の変形菌¹⁴⁸⁾」であった。なお対象書籍・論文のうちで「社叢“林”」と表記したものが4件あった。

表-7 緑地の機能一覧および本研究における緑地機能の項目
Table 7. The list of functions of green space and the category of function of green space on this study.

緑地の機能	著者・年										本研究で 用いる 項目名	番号
	恒川	平田	日本公園 緑地協会	只木	青柳 ら	高原	進士	北海道立 林業試験場	高原	高橋 ら		
	2005	2004	2002	1989	1989	1978	1975	1975	1974	1972		
気象調節, 防風, 防塵, 大気浄化, 騒音 振動防止	○		○	○	○	○	○	○	○	○	9 公害防止	①
景観形成, 修景	○	○	○	○	○	○	○		○		8 景観	②
防災		○	○	○		○		○	○	○	7 防災	③
生物の生息空間, 生物多様性維持	○	○		○			○	○		○	6 生物生息空間	④
健康づくりの場, スポーツ・レクリエー ション		○	○	○		○	○		○		6 レクリエー ション	⑤
環境教育, 学術教化		○		○	○	○	○	○			6 環境教育	⑥
癒し, 安らぎ, 精神安定	○	○	○	○			○				5 癒し	⑦
歴史文化資産の保全活用, 文化財保護		○	○	○	○	○					5 歴史文化	⑧
地球環境問題への対応, 二酸化炭素固定	○	○		○							3 地球環境	⑨
地域コミュニティの形成		○	○								2 コミュニティ	⑩
市街地形態規制, 交通の安全性と快適性			○			○					2 市街地形態規制	⑪
経済的効果, 周辺地域の価値上昇, 医療 費等の軽減			○								1 経済的効果	⑫

表-8 空間概念の項目
Table 8. Categoris of spatial conceptions.

文中で想定されている空間概念	記号
神社境内全体（森林以外も含む）	A-1
神社境内内森林	A-2
神社境内内森林が存在する聖域	A-3
境内背後の森林部分（神体山）	A-4
風土そのもの	B
寺院境内全体（森林以外も含む）	C-1
寺院境内内森林	C-2
境内背後の森林部分（霊山）	C-3
それ以外の場（地域の中で森がある場所）	D
場所でない（精神的なもの）	E

2) 鎮守の森

「鎮守」を題目に含む書籍・論文総数は149件であり、その内「鎮守の森」を題目に含むものは56件(38%)であった。鎮守の森を題目に含む文書の初出は1917年「鎮守の森と盆踊¹⁴⁹⁾」であり、その後1973年「鎮守の森¹⁵⁰⁾」までの56年間鎮守の森を題目に含む書籍の刊行は行われなかった。1975年-1976年にかけて「鎮守の森¹⁵¹⁾」全7巻が刊行されたが、これは日本の歴史を民俗学的視点も含めて広く扱った事典的要素の強い書籍の題目としてつけられたものであり、

表-9 分析対象文献該当数
Table 9. The number of books and journals for the analysis of this research.

	公共機関発行報告書 および一般書籍	学術論文	合計数
「社叢」	9	12	21
+ 「林」	1	3	4 (全「社叢」中21%)
「鎮守」	65	84	149
+ 「森」	33	23	56 (全「鎮守」中38%)
「社寺」	355	276	631
+ 「林」	9	33	42 (全「社寺」中9%)

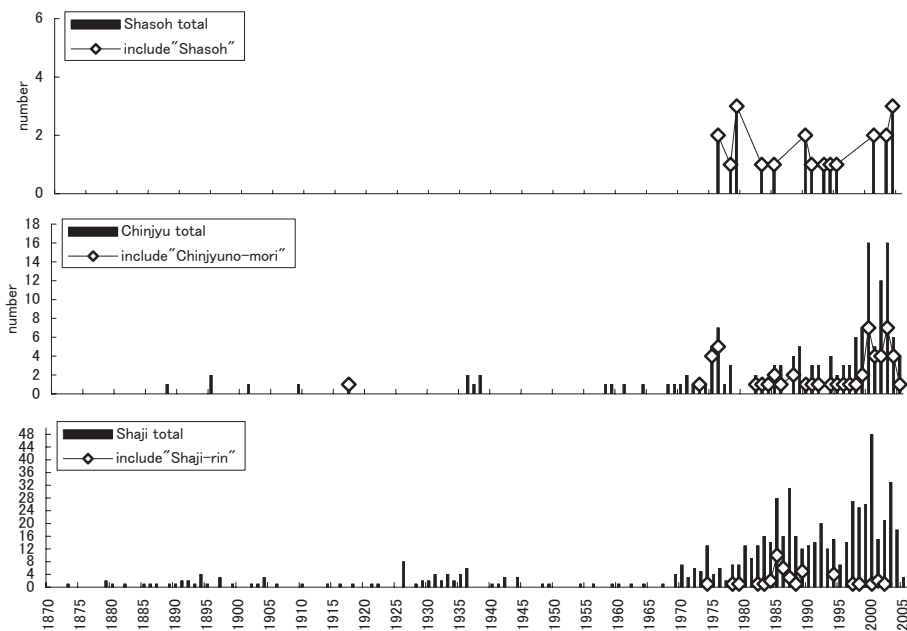


図-4 「社叢」(上)「鎮守」(中)「社寺」(下)の書籍論文数の変移
Fig. 4. Transition of the number of books and journals about *Shasoh*, *Chinjyu* and *Shaji*.

直接的に鎮守の森に焦点を当てたものではなかった。以降 1996 年まで各年 0-2 件の推移を経たが、2000 年-2004 年は各年 3-4 件刊行された。一方、学術雑誌における初出は 1975 年「ジオラマ「照葉の森」- 鎮守の森を複元の望み¹⁵²⁾」であり、その後 1983 年、1985 年、1991 年、1997 年、1998 年の各 1 件を経て、1999 年以降各年 3-4 件と増加した。また、対象書籍・論文のうちで「鎮守の“森”」を含まないものは 93 件 (62%) であり、その内訳は軍政官庁である鎮守府、若しくは地域や造営物を守護するために祭られた神である鎮守神に関する書籍・論文であるという傾向が 1888 年から 2005 年まで一貫して認められた。

3) 社寺林

「社寺」を題目に含む書籍・論文総数は631件であり、その内「社寺林（社寺境内林）」を題目に含むものは42件(9%)であった。社寺林（社寺境内林）を題目に含む文書の初出は1974年「神奈川県社寺林調査報告書」であった。1984年-1989年にかけて雑誌「法律のひろば」誌上に「社寺林と法¹⁵³⁾」全22号が随時掲載された。調査研究文書において「社寺林」を題目に掲げる傾向は1990年代以降が中心であり、1989年-2002年にかけて各年1-2件¹⁵⁴⁾⁻¹⁶⁰⁾が認められた。また、対象書籍・論文のうちで「社寺“林”」を含まないものは、1930年代までは法制度に関する書籍が多いという傾向があり、1930年代から現在までは一貫して社寺建築に関する書籍・論文が多い傾向が認められた。

3.3.2. 語彙の概念に関する分析

緑地の機能とそれらのオープンスペースに対する緑地空間概念の分析では、連載もの¹⁶¹⁾は統一された定義に従っているとして1カウントとして分類分析を行った。その結果を表-10、表-11、表-12にまとめ「社叢」「鎮守の森」「社寺林」ごとに該当する割合を百分率で示した。なお緑地の機能に関しては表3-7で定めた緑地の機能項目の中で公害防止(①)に準ずる項目が発生したため、新たに『①' 公害の指標』の項目を設けた。また生物生息空間(④)とは若干ニュアンスが異なり対象が特に植物や植生や植物生態学的側面に着目されている場合として『④' 植生的対象価値を有する場』の項目を設けた。また文献によっては文中に定義や説明に該当する文章が明確でないものもあったが、その場合は具体的な研究対象地名からそれが想定している空間概念を抽出した。

1) 社叢

「社叢」の特徴として、生物生息空間(④)、特に植物生態学的側面(④')に焦点を当てているものが46%と高い値を示した。またそれらが想定している空間概念もA-2の神社境内内森林が85%ときわめて高い値を示した。一方C-2の寺院境内内森林までも「社叢」の空間概念に含めているのは「寺院の森も広い意味の社叢に含めてよい¹⁶²⁾」として「鎮守の森は社叢の代表的なものにすぎない¹⁶³⁾」とする文献の解釈であった。また、独特の解釈で社寺の樹林として「社叢」を定めていた例として、建築物である『社殿』の対語として樹林の部分に「社叢」を用いて解釈している例¹⁶⁴⁾が一件だけ存在した。

2) 鎮守の森

「鎮守の森」の特徴として、それが想定する空間に期待されている緑地の機能として、①から⑫までのほぼ全ての項目の機能が当てはめられていることが特徴的であった。その中でも景観(②)24%、歴史文化(⑧)33%、癒し(⑦)29%、コミュニティ(⑩)29%の結果からは鎮守の森に対して精神的・文化的な拠り所としてこの空間を扱おうとする意図を読み取ることができるのではないだろうか。またそれらが想定している空間概念もBを除く全ての項目が想定されていた。神社の空間のみにあらず、C-1、C-2、C-3の寺院、Dの地域の中で森がある場所、果てはEのように具体的場所ではない精神的なものとしての概念を想定している事例も存在した。

3) 社寺林

「社寺林」の特徴として、景観(②)25%、植物生態学的側面(④')58%、歴史文化(⑧)33%、経済的效果(⑫)17%といった多様な機能を幅広く期待されているということが挙げられた。この事は、「社叢」「鎮守の森」では該当しなかった公害の指標(①')17%および防災(③)

表-10 社叢に対する緑地の機能と空間概念
Table 10. Functions and their spatial conceptions of *Shasoh* as green spaces.

想定している空間概念																								
緑地の機能																								
①	①'	②	③	④	④'	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	A-1	A-2	A-3	A-4	B	C-1	C-2	C-3	D	E	
社叢(%)	0	0	15	0	46	46	8	0	0	38	0	15	0	0	0	85	8	8	8	0	15	0	0	0
1970年～				●	●	●				●					●	●								
				●	●	●									●	●								
				●	●	●									●	●								
1980年～										●					●	●								
1990年～			●		●	●				●					●	●								
				●	●	●				●					●	●								
2000年～															●	●					●			
															●	●								
															●	●								
															●	●								

文中での定義・説明

1970年代 ・都市の中の森として貴重な存在 ・自然林 ・原生林の要素が残っている森林 ・よく保存されてきた自然性の植分が残存 ・基準群落ともなり得る貴重な植生

1980年代 ・神社の樹林

1990年代 ・その土地の環境・立地に基づく郷土色あるもの ・郷土色をもつうちにも尊厳の感じを与え、崇高なる気分を至現しているもの ・原始的であること、少なくとも自然林の様に落ち着いていること ・社叢の変遷

2000年代 ・単なる「神が坐す森」ではなく、「土地の神が坐す森」 ・地霊を和み、その土地を守護する「鎮守の森」そのものだが、社叢は、鎮守の森だけでは限らない ・鎮守の森と同義 ・現地の原植生を今に残す大変貴重な植生群落 ・the grove of a village shrine ・杜(モリ)と同義 ・神社の境内の林分 ・社叢といえどもとていばイコール神社の森・鎮守の森とのみうけとられやすいが寺院の森もみのがせない(寺院のなかに杜が設けられ(神宮寺)ていたことなどから) ・「社叢」は土地の神のモリであり聖なるコミュニティのモリでもある。その意味では首塚・経塚のたぐいの伝説の塚とか古墳のモリなども広い意味の社叢といえよう。もともと古墳には樹林はなかったが、時代がたつと古墳にも樹木が自生して、古墳のモリができる。こうした「塚の木立」なども社叢に加えてよい。

・自然的な価値だけでなく、伝統・文化を支える舞台 ・オーブンスペース ・レクリエーションの場 ・鎮守の森と同義は環境を反映する緑の鏡(環境悪化の指標) ・社寺の樹林(建築物である「社殿」の対語として「社叢」を用いている)

文中での定義・説明

1970年代 ・都市の中の森として貴重な存在 ・自然林 ・原生林の要素が残っている森林 ・よく保存されてきた自然性の植分が残存 ・基準群落ともなり得る貴重な植生

1980年代 ・神社の樹林

1990年代 ・その土地の環境・立地に基づく郷土色あるもの ・郷土色をもつうちにも尊厳の感じを与え、崇高なる気分を至現しているもの ・原始的であること・少なくとも自然林の様相に落ち着いていること ・社叢の変遷

2000年代 ・単なる「神が坐す森」ではなく、「土地の神が坐す森」 ・地霊を和み、その土地を守護する「鎮守の森」そのものだが、社叢は、鎮守の森だけでは限らない ・鎮守の森と同義 ・現地の原植生を今に残す大変貴重な植生群落 ・the grove of a village shrine ・杜(モリ)と同義 ・神社の境内の林分 ・社叢といえど、いよいよコールドコール神社の森・鎮守の森とのみうけとられやすいが寺院の森もみのみがせない(寺院のなかに社が設けられ(神宮寺)でいたことなどから) ・「社叢」は土地の神のモリであり聖なるコミュニケーションのモリでもある。その意味では首塚・経塚のたぐいの伝説の塚とか古墳のモリなども広い意味の社叢といえよう。もともと古墳には樹林はなかったが、時代がたつと古墳にも樹木が自生して、古墳のモリができる。こうした「塚の木立」なども社叢に加えてよい。

・自然的な価値だけでなく、伝統・文化を支える舞台 ・オーブンスペース ・レクリエーションの場 ・鎮守の森と同義は環境を反映する緑の鏡(環境悪化の指標) ・社寺の樹林(建築物である「社殿」の対語として「社叢」を用いている)

表-11 鎮守の森に対する緑地の機能と空間概念
Table 11. Functions and their spatial conceptions of Chiniyuno-mori as green spaces.

	緑地の機能												想定している空間概念											
	①	①'	②	③	④	④'	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	A-1	A-2	A-3	A-4	B	C-1	C-2	C-3	D	E
鎮守の森(%)	5	0	24	0	33	14	24	19	29	33	10	29	0	5	48	48	5	5	0	10	14	5	19	14
1910年～	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
1970年～																								
1980年～			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
1990年～			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
2000年～			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

1910年代	・郷村の守護神たる産土神を祀れる神域	・敬神の思想此に興り	・愛郷の精神此より湧く	・申請にして犯すべからざる崇敬なる霊場	・老幼男女の為に解散せられたる娯楽の殿堂	・愛郷心の湧き出づる揺籃	・寺院と共に、最もなつかしき思い出の胚種となるもの	・念ふに愛郷心とは鎮守の森とを中心として、我が生まれ故郷を愛し懐かしむ精神をいふのであらう	・神社が鎮守森を負ふて一郷風致の中心を成してゐると共に、寺院も亦概ね高燥の境に設けられ、自ら清閑幽寂の風致を成してゐる																	
1970年代	・神社の森(ただし内容に直結しているものではない)																									
1980年代	・野鳥などの森林の小動物を守るための場	・色々な意味において大切な憩いの場	・その土地の守護神を祭った神社を取り囲む木立、又は木立に囲まれた社域全体																							
1990年代	・歴史、美術、工芸等の分野で価値の高い物を有する	・植物、動物、鉱物、動物などを有する	・環境問題をはじめ、景観、地域社会など様々な側面からの位置付けが可能など、とても魅力的な存在	・日本での価値、住みたくなくなる空間、足を運んでみたくなくなる空間	・歴史的に受け継がれた様々な価値を有する場	・自然的価値、自然共生、生物相の種の保存	・文化的価値、歴史、建築物、景観	・環境的価値、住みたくなくなる空間、足を運んでみたくなくなる空間	・社会的価値、コミュニケーション、教育活動、地域社会の活性化、歴史的精神的中心	・情報交換の場	・地域内各所にある森林	・神社内の森林	・言葉自体は古くない													
2000年代	・大半の原風景は近代以前に廻れない	・杜・寺林と同義	・神社、寺、屋敷林、山の尾根、急斜面、渓谷沿いの森	・我々のこのころの原郷	・宗教観	「鎮守の森」信仰	・単なる「神が坐すまま森」ではなく、「土地の神が坐す森」	・地霊を和み、その土地を守護する「鎮守の森」そのものだが、社叢は、鎮守の森だけとは限らない	・四季を通じて楽しめるように配慮した庭園の植栽	・集落の精神的な拠り所、抗争の際、決起の場	・攻撃的	・新を手に入れる場	・破壊と再生を繰り返す森	・周到な計画の下に造成、管理され、地域特性、樹種構成で維持、熟成されていったもの	・森林の多面的機能の一つ「文化」の機能	・環境問題をはじめ、景観、地域社会など様々な側面からの位置付けが可能など、とても魅力的な存在	・日本での価値、住みたくなくなる空間、足を運んでみたくなくなる空間	・歴史的に受け継がれた様々な価値を有する場	・自然的価値、自然共生、生物相の種の保存	・文化的価値、歴史、建築物、景観	・環境的価値、住みたくなくなる空間、足を運んでみたくなくなる空間	・社会的価値、コミュニケーション、教育活動、地域社会の活性化、歴史的精神的中心	・情報交換の場	・地域内各所にある森林	・神社内の森林	・言葉自体は古くない

1910年代 郷村の守護神たる産土神を祀れる神域・敬神の思想此に興り・愛郷の精神此より湧く・申請にして犯すべからざる崇敬なる霊場・老幼男女の為に解放せられたる娯楽の殿堂・愛郷心の湧き出づる描藍・寺院と共に、最もなつかしき思い出の胚種となるもの・念ふに愛郷心とは鎮守の森と寺院とを中心として、我が生れ故郷を愛し懐かしむ精神をいふのであらう・神社が鎮守森を負ふて一郷風致の中心を成してゐると共に、寺院も亦概ね高燥の境に設けられ、自ら清閑幽寂の風致を成してゐる

1970年代 神社の森(ただし内容に直結しているものではない)

1980年代 野鳥などの森林の小動物を守るための場・色々な意味において大切な憩いの場・その土地の守護神を祭った神社を取り囲む木立、又は木立に囲まれた社域全体・市街化の進む都市内の貴重な緑地空間・歴史的に受け継がれた様々な価値を有する場・自然的価値・生物相の種の保存・文化的価値・歴史・建築物・景観・環境的価値・住みたくなくなる空間、足を運んでみたくなくなる空間・安らぎ、レクリエーション・社会的価値・コミュニティ・教育活動・地域社会の活性化・歴史的・精神的中心

1990年代 歴史、美術、工芸等の分野で価値の高い物を有する・植物・動物・鉱物などを有する・情報交換の場・地域内各所にある森林・神社内の森林・言葉自体は古い・大半の原風景は近代以前に廻れない・社寺林と同義

2000年代 ひろく地霊をまつた森・ふるさととの森・神社、寺、屋敷林、山の尾根、急斜面、溪谷沿いの森・我々のこのころの原郷・宗教観「鎮守の森」信仰・単なる「神が坐ります森」ではなく、「土地の神が坐ります森」・地霊を和み、その土地を守護する「鎮守の森」そのものが、社叢は、鎮守の森だけとは限らない・四季を通じて楽しめるように配慮した庭園の植栽・集落の精神的な拠り所、抗争の隠、決起の場、破壊と再生を繰り返した森、周到な計画の下に造成・管理され、地域特性・樹種構成で維持、熟成されていったもの・森林の多面的機能の一つ「文化」の機能・環境問題をはじめ、景観、地域社会など様々な側面からの位置付けが可能で、とても魅力的な存在・日本のエコボリス(=自然らしさと人間らしさの両方をあわせ持った町)・守護霊がおわします聖地・靖国が近代日本を靖くする唯一鎮守の森(靖国神社の祭神が国の繁栄を導く守護神であることから)・聖なる森・マツリを媒介にカミとヒトが交わる祭り合い自治の場・愛郷心が培われる場・民衆の慰安と娯楽の場・神話や伝説を育む場・自然の景勝を保存する場・その土地の守護神をまつた神社を取り囲む木立、または木立に囲まれた社域全体・社叢といえればイコール神社の森・鎮守の森とのみうけとられやすいが寺院の森もみのがせない(寺院のなかに社が設けられ(神宮寺)ていたことなどから)

表-12 社寺林に対する緑地の機能と空間概念
Table 12. Functions and their spatial conceptions of *Shaji-rin* as green spaces.

[illegible]

8%としての機能についても期待されている空間として位置づけられていることから指摘できた。またそれらが想定している空間概念も「社叢」「鎮守の森」に比べ明瞭であった。A-2の神社境内内森林とC-2の寺院境内内森林がそれぞれ75%と67%と際立って高い値を示し、且つ両者の差異が少なかった。むしろ一方に限っているもの¹⁶⁵⁾のほうが稀であった。

4) 語彙の概念

文献数や頻度や初出時期のすべてにおいてそうであるように、社叢という言葉は「鎮守の森」や「社寺林」と比べ一般に普及しているとは言い難い。「社叢学研究¹⁶⁶⁾・¹⁶⁷⁾」に収められた論文¹⁶⁸⁾で用いられる例や、そのほか数点の書籍¹⁶⁹⁾に認められるが、それとて副題として社叢の語も用いているに過ぎず、このことから未だ「社叢」が広く認知された語ではないことが推察できる。前項までの分析で明らかになったように生態的・植物学的な機能を有する神社境内内森林である「社叢」は、そこが『神道』の森であるという点にも注意を払う必要がある。「社叢」が公式的に使用された例として史蹟名勝天然記念物保存法とそれに関連する事項による解釈は注目に値する。公的な制度の中では文化財保護法やその一部の前身にあたる史蹟名勝天然記念物保存法において、天然記念物の植物の項に「社叢」が記載されており、実際現在までに全国で18箇所の社叢が天然記念物として指定¹⁷⁰⁾されている。現在の文化財保護法では、天然記念物の植物の第一要目に「一、名木、巨樹、老樹、畸形木、栽培植物の原木、並木、社叢」として規定されている。さらに史蹟名勝天然記念物保存法の中においては、天然記念物の植物の一要目の第一番目に、「一、社叢、著シキ並木、名木、巨樹、老樹」¹⁷¹⁾として規定されている。法の成立・運用の過程において、特に天然記念物という観点に着目した社叢というものの位置付けや言葉の使われ方の変遷に関しては藤田(2004)¹⁷²⁾に詳しい。これは、生態的・植物学を専門とする立場の白井光太郎や三好学らの発言等に着目したものであり、いわば科学的視点に着目した点からのアプローチであった。その一方で、史蹟・名勝に対しては、雑誌「史蹟名勝天然記念物保存法」には二つの性格が混在している¹⁷³⁾ことが指摘されている。第一の性格は、史蹟・名勝に対して体系的に用いられたもので、歴史学の黒板勝美や植物学の三好学に代表されるように欧米の実態を紹介しその方法に学ぶという文脈及び国文学者にみられる江戸期以来の文献に基づく実証主義の文脈からなるもの¹⁷⁴⁾である。そして第二の性格は、史蹟・名勝を、ナショナリズムの発揚と結びつけ、国民教化の媒介たらしめようとする、天皇制イデオロギーとしての性格である。明治以前の神仏習合および幕府から擁護されていた仏教中心の社会を崩す必要があり、保存すべき価値ある存在として「神道」の森である社叢は、明治天皇御遺跡等と同じように、その対象となるべき空間であったと考えられる。この立脚点を加味して「社叢」を捉えると、神仏分離政策や国家神道という国策との関わりが見て取れる。つまり、社と寺は混合して用いるべきではなく、あくまで「神道」の森である社叢という語を用いる必要があったと推測できるのである。同時にこの事は、「社叢」が用いられるようになったのが明治以降であることを窺い知る手掛かりにもなり得る。つまり江戸時代までの神仏習合を根拠とすれば、人々の意識の中に社と寺を分けて捉える「ものの見方」が存在しない以上、明治以前には、神社の森をさして使う「社叢」という語は存在しないのであると言えるのではないだろうか。

また、近年では「社叢」を神社の森のみに限らず広い意味で用いる傾向が認められ始めている。2002年に設立された社叢学会¹⁷⁵⁾の理念はこの解釈に基づいたものと考えられる。ここでの解釈は大変幅が広く、「鎮守の森」の解釈よりも包括的なものと捉えており、首塚・経塚の様な伝説の塚や古墳のモリなども広い意味の社叢に加えてよい¹⁷⁶⁾とされ、「鎮守の森は社叢の代表的

なものにすぎない¹⁷⁷⁾」としている。ここでは社叢の「社」という語に着目し、「社」は土地の神、土地の神々を中心とするコミュニティを意味するものであり、「社会」「結社」「会社」などの熟語もまたそこから誕生したものであるため、社叢とは土地の神のモリであり聖なるコミュニティのモリでもあるという説明がなされている。この解釈には神仏習合によって生まれた「神も仏も」とのシンクレティズム(重層信仰)¹⁷⁸⁾をとって発展してきた日本の宗教の経緯が重要視されたことの現れであるともいえる。

つぎに「鎮守」に関してであるが、これには鎮主という漢字も当てられるが、現在では「一国・王城・寺院・村落など一定の地域で、地霊をなごめ、その地を守護する神¹⁷⁹⁾」と定義付けられている。だが元来は鎮守守護の意味で鎮守府や鎮守使など形容語¹⁸⁰⁾として用いられ、辺境に軍を駐屯させて乱を鎮めその地を守ること¹⁸¹⁾とされていた。その後、土地や施設を霊的な疫災から守護する「神」を指して「鎮守」と呼ぶようになった。また「鎮守神(ちんじゅのかみ)」という語も、ある一定の土地や建物を鎮安守護する神¹⁸²⁾という意味で、鎮守と同様に用いられた。また大乘仏教の護法善神の思想によって寺院の守護神として神道の神を勧誘したもの¹⁸³⁾を指す。この鎮守もしくは鎮守神としては、具体的には王城鎮守・日本鎮守等国家擁護の神、一国一群の鎮守、荘園・村落の鎮守、寺院鎮守、城・館・邸宅などがあげられる¹⁸⁴⁾。また大乘仏教の護法善神の思想によって寺院の守護神として神道の神を勧誘したもの¹⁸⁵⁾を指し、高野山の羽生明神、比叡山の山王権現などは寺院建立以前からの地主神を鎮守神として改めて祀ったといわれている。つまり「鎮守」「鎮守神」は平安朝以来の成語で、神仏混淆時代の仏教に由来する語である¹⁸⁶⁾といえる。仏法擁護の神として寺院に鎮守神を勧請した例が早い。これは中国の寺院における伽藍¹⁸⁷⁾神に源流を持ち、神仏習合が盛んになってくる奈良・平安初期時代にかけて我が国に取り入れられ、王城・朝家や一国を守護する神を称するようになった。平安時代から地方の荘園に領主の鎮守を盛んに分嗣したこともあって、次第に村落にも鎮守信仰が普及し、近世には村の産土神も鎮守と称するようになった。ただ、これに関しては、鎮守神と産土神を区別し、鎮守神はその土地や村や地域を守る神、産土神は個々人の一生涯を守る神であり、その両者を包括して「氏神」と呼ばれる神があるという解釈もあるので注意が必要である。いずれにしても鎮守そのものに「神」という概念が含まれているということは指摘出来る。その後更には、その神が祀られている場所、つまり集落ごとに祀られている施設である「神社」を指して鎮守と呼ぶようになり¹⁸⁸⁾、「鎮守」が含有する意味は拡大した。

一方「鎮守の森」の「モリ」に関しては、古代日本語では「母理」「文理」「茂理」という語も充てられ、天然の神の杜という意味で用いられた¹⁸⁹⁾とされており、神社そのものを指す語としても用いられ、「森」「神社」「社」「杜」という漢字が充てられた。中国では「杜」は「ト」と読まれ、ヤマナシという果実、あるいは「塞ぐ」という意味で使われ、「モリ」という発音・読み方はなく、意味的にも日本で言う「森」というものは無い。ましてや「神社」を指す言葉でもない。つまり「杜」が、日本独自の概念であることがここから推測できる。この「杜」と「鎮守」の組み合わせである「鎮守(ノ)杜」という語は鎮守の森の表現として「夜明け前」(1929-1935)に記載が認められる¹⁹⁰⁾。分析対象文献における初出は「鎮守の森と盆踊¹⁹¹⁾」であり、ここでは鎮守の森の意味的な対語として盆踊を取り扱われている。つまりは神社や神道の精神の拠り所として鎮守の森を、仏教的精神の拠り所として盆踊を取り上げていた。辞典類における初出は、「大増訂ことばの泉(補遺)」であり、その後も鎮守の森が一般的な用語として認識されていたことは、1917年、1921年、1936年、1952年に各々刊行された辞典類に掲載されていたことが

らも推測できる。なお最新の神道史大辞典¹⁹²⁾では、鎮守の森は「鎮守の社がある森」と定義されている。

1965年代後半からは、植物生態学の分野で土地本来の植生を保存する森林として注目されるようになった¹⁹³⁾。これは宮脇昭の活動に因るところが大きいと考えられる。宮脇は、単に神社の森だけでなく、ひろく地霊をまつた森¹⁹⁴⁾という意味でこの言葉を用い、高木層・亜高木層・低木層・下草層という土地本来の森の立体的な構成が残された土地の潜在自然植生、即ち「土地本来のふるさとの木によるふるさとの森が残されている場所¹⁹⁵⁾」「ふるさとの木によるふるさとの森」として鎮守の森を定義付けて積極的に使用した。更には生態学の分野においてこれを国際語として認知させた(Chinjuno-mori after Miyawaki 1974)¹⁹⁶⁾。この定義に従えば、神社や寺院や、古い屋敷林の中や、山の尾根、急斜面、渓谷沿いにある土地本来の森¹⁹⁷⁾までもが鎮守の森、ということになる。なお最新の神道史大辞典¹⁹⁸⁾では、鎮守の森は「鎮守の社がある森」と定義されている。

以上のことから「鎮守の森」は、古来から地霊をまつる聖なる空間やその神に対して用いられてきた語が、生態学的研究対象として地域の本来の潜在自然植生が顕在化している場所として着目されたことなどにより、科学的・精神的・宗教的・地理的・景観的な側面からの様々な意味づけが可能¹⁹⁹⁾である語として位置づけられ、「ふるさとの木によるふるさとの森」という広範囲にわたる対象に対して用いられる語となって現在に至ると解釈出来る。

一方で、文学史学の観点から鎮守の森の研究に関わり続けた上田らは、歴史学や民俗学の分野を中心に行われてきた研究の不十分さを読み取り、文学・史学・考古学・地理学・植物学・建築学・都市計画学などを網羅した包括的な研究フィールドとして鎮守の森を捉え、1990年代から調査研究を行い²⁰⁰⁾、「学」としてこの場を位置付けた。あらゆる分野から鎮守の森に着目しようとする視点が彼らによって創造されたといつてよい。更に現代では、鎮守の森は郷土意識を代表する家郷²⁰¹⁾景観の一つ²⁰²⁾に数えられ、日本的な景観として海外からも注目されている²⁰³⁾。ある文明史家はその著作²⁰⁴⁾中で「鎮守の森」と題して次のように記している。『最も印象的な映像は、ほかでもない森と社とが密接に結合されているということである。(中略)あたかも日本の〈神〉が全自然を満たしている聖なる流れの凝結した一滴に他ならぬように、日本の神社は、森という神聖にして広大な住居の最も圧縮された建築的表示ともいべきものである。』ここでは「鎮守の森」は「森と社の聖なる結合」であり、これが神社の本質であり、伝統的日本人の家郷意識に触れる神道の聖地である²⁰⁵⁾と解釈され、日本古来の森林文化を再評価するための対象ともなってきた。つまり「鎮守の森」は神社の森に限らず、寺院・屋敷林・山の尾根や急斜面・渓谷沿いなどの土地本来の森²⁰⁶⁾を指して用いることが出来、例えば、その周辺の二次林や里山に相對する場所であるという位置付けも可能であるということになる。

つぎに「社寺林」であるが、「社寺」という語は明治以降の用語であり、江戸時代までは「神社」という語が使われていた²⁰⁷⁾。明治を境に社と寺の順序が入れ替わったのは神仏分離政策や神道指令によって社と寺を分離し、神道を上位に位置付けた事にその原因があると考えられる。この社寺という言葉は明治期に政府機関によって用いられている。例えば社寺領上地(太政官布達)、社寺風致林(森林法)、古社寺(古社寺保存法)等である。宗教と非宗教の区別の明確化や宗教政策・神社政策において、両者に跨る恰好となる「社寺」という言葉は本来あまり好ましくない枠組であった²⁰⁸⁾。そういう中においても社と寺の両方を扱う「社寺」という語が行政府自身によって盛んに用いられていたのは、両者が簡単には分かれ難い関係にあったということを示

唆するものである。つまり、社寺林という括りは本来自己矛盾を抱えながらも現実の空間を前にして用いらざるを得なかった言葉であると考えられる。ここからは概念を越えて現物の空間を指し示す語としての「社寺」が持つ意味を読み取ることが出来る。

実際に「社寺」を用いた社寺上地林に対する行政の動きを追うと 1870 年の社寺領上知の太政官布告によって境内地以外の社寺領が上知林として官有化された。1871 年境内外区別処分によって従来の境内のうち祭典・法要に必要な堂宇・社殿の敷地・広場のみを新境内と限定し、墓地を除く田畑・山林・不毛地などは社寺上地林として各府県の管轄のもとに官有地として取り扱われるようになった。しかし上地区分の進行につれ境内外の濫伐が起った。この原因の一部には社寺が上地にたいして反抗的に行った事例²⁰⁹⁾もあるといわれている。太政官達第二百三十五号により社殿堂宇などの修繕のためであっても境内の樹木を伐採することを禁じ、伐木を必要とするときは、各地方庁へ願い出て許可をうけるよう命じた。しかし社寺側の行いは止まなかったため、その後も政府は内務省達の措置を講じ続けた²¹⁰⁾。1877 年頃までには、官林に編入され地方庁の管理下におかれた社寺上地林の民間への払い下げや入会林野が官有化されたことに対する農民の抵抗²¹¹⁾によって官有林は荒廃し、その管理に困難を極めた。政府は社寺に委託して保管させた方が得策と判断し、1884 年農商務省坤林第百八十四号内達、社寺上地官林委託規則を決定した。

その後 1990 年に勅令第二百七十五号官有財産管理規則の制定、翌年に農商務省令第五号で改正された社寺上地官林委託規則の制定、1895 年に社寺境外上地林還付に関する法律および社寺林法案の二法律案の議会への上提等を経て、社寺保管林規則（第三百六十一号）が成立した。これは社寺の窮状を救済する目的で上地林の保管を社寺に任せ、一定の使用収益を許可して社寺の基本財産を助成する²¹²⁾というものであり、形式上は委託林から保管林への移行によって社寺の林地使用・伐採制限は緩和されたが、実際上の拒否権は、殆ど一方的に政府側に握られていた²¹³⁾。1917 年には、保管林制度を緩和して社寺営林の助成を図り、社寺林の国有化が貫徹された。伐採の制限をさらに強化しほぼ禁伐となったのが保存森林であり、社寺もこの中の一部に加えられている²¹⁴⁾。また、委託林の制度は国有林野法に引継がれ²¹⁵⁾社寺林の取扱に対する修正・追加が行われた。この一連の政策における社と寺の区別としては神社境内が国有財産法によって公用財産とされた事や、寺院の境内に対する境内地処分などがあげられる。上地林制度は第二次世界大戦時まで継続されたが、戦後の神道指令による対宗教政策の流れの中で神社林も官有林から神社へと譲渡され、社寺林は社と寺の区別無くどちらも民有林となった。

学術分野においては、1974 年に四手井らを中心とした大規模な社寺林調査が開始され随時報告²¹⁶⁾された。「森林²¹⁷⁾」の冒頭には「社寺林即ち鎮守の森」という記載があり、さらに「社の社叢」「社叢について調査」とも書かれている。ここからは、想定する対象の抽象性や具体的イメージの範囲によって著者が言葉を適宜使い分けている様子が推測される。現在では社寺林は、土地開発の中で残されてきた貴重な植生の遺存として関心が持たれ²¹⁸⁾、生態学的な意義から現植生の推定が可能な場、環境保全地域の設定の基礎としての役割を担う場、環境調節機能と精神的基盤などの社会的意義も強調されている²¹⁹⁾。神社林が自然状態に近いものが多いのに対して寺院林は人工林が多い²²⁰⁾と指摘されているが、この原因として神社と寺院の管理形態・歴史・社寺境内内部と周辺の土地利用・面積や種子散布の問題などが指摘されている²²¹⁾。このような生態学的な差異が指摘されているにもかかわらず学術研究においては「社寺」を組み合わせた語（社寺林、社寺境内林、社寺境内地等）を用いる場合が多い。この理由として考えられるのは、これらの研究がその空間を林業林や二次林の比較対照として捉えていることが要因であると考え

られる。常緑広葉樹を主体とした社寺林は林業林と異なり、「入らずの森」「伐らずの森」として最小限しか手を加えずに自然のまま放置された結果としてこの空間を自然林に近い貴重な森林として捉えているものと考えられる。

3.4. 結論

本章の結論は以下の通りである。

本章では、“神社の屋外空間”を指して用いられる類義語に対し、語彙自体の使用の変遷を明らかにするための書籍・論文出現頻度に関する分析と語彙が想定する対象を広く収集分析する語彙の概念に関する分析を組み合わせることによって、量的側面と質的側面の双方から実態を明らかにし、神社のオープンスペースに対する緑地の空間概念の差異と特徴を明らかにした。

その結果、数値分析処理による包括的な傾向として「社叢」「鎮守」「社寺」と「森」や「林」といった語が組み合わされる傾向が強まったのは1970年代中盤以降であり、この時期を契機として“神社の屋外空間”を「緑」の空間として認識しようとする見方が形成された事が示唆された。また、「鎮守の森」や「社寺林」が、元々“聖なる場”や“神社や寺院”などの意味をもつ「ある空間」に対して自然や緑地といった概念を加えることで成立してきた空間概念であるのに対し、「社叢」は元来からそれ自体に自然や緑地といった概念を含む空間概念であった。

各々の言葉が対象とする空間概念の範囲に関しては次のことが示された。神仏分離政策などの国策との関わりという歴史を経て、「社叢」が指し示す空間概念には神社境内内森林の生物生息空間、特に植物生態学的側面に着目するという空間概念が強いこと、「鎮守の森」が指し示す空間概念には古来から地霊をまつる聖なる空間やその神に対して用いられてきた語が生態学的研究対象として地域の本来の潜在自然植生が顕在化している場所として着目されたことなどにより、神社の空間のみならず精神的・文化的な拠り所という広範囲な解釈として捉えられている空間概念が強いこと、「社寺林」が指し示す空間概念には明治期の土地政策・林野政策の中での位置付けに対して用いられた歴史を経て、機能面や制度に着目した場合や現物の空間を表現する場合の対象となる空間に対して求められた空間概念が強いことが示された。

第4章 法の成立・運用の過程における「社叢」の概念及び位置づけ

4.1. 本章の目的

前章までの研究の結果、社叢が神社の屋外空間を緑地という観点から表現する言葉として適当であることを論じたが、本章ではさらに社叢という言葉に着目し、この言葉が用いられるようになった経緯やその理由をより明確にするため、法制度上で「社叢」という言葉（概念）が用いられた史蹟名勝天然記念物保存法をとりあげ、その要目に入ることになった経緯とそれに至る背景に着目することとした。

従って本章では、史蹟名勝天然記念物保存法の成立・運用の過程における社叢というものの位置づけや、その言葉の使われ方の変遷を辿る事により、「社叢」という言葉の意味や「社叢」という言葉が使用されてきたことの意義を明らかにし、その空間概念を明確にすることを目的として研究を行った。

4.2. 本章の研究手法

対象資料を雑誌『史蹟名勝天然紀念物』とした。これは1914年から1922年及び1926年から1944年に刊行された雑誌である。本誌に掲載された全記事中、社叢・神社・社寺、及びそれに関連する記事を全て抽出し、分析対象とした。これらの記事を時系列に並べ、関連する法律における位置付けを加味しながら「社叢」という言葉の意味及び使用の意義に関して分析を行った。

4.3. 結果

4.3.1. 史蹟名勝天然紀念物の誕生とそれに関連する法律

史蹟名勝天然紀念物保存法は1919年(大正8)に制定されたが、そこに至るまでもいくつかの法や規則が発せられている。文化財保護の発展と流れは、表-13の通りである。文化財保護行政の発端は、内務・宮内両省が担当した太政官布告・古器旧物保存方(1871年(明治4))であり、その後担当が内務省社寺局に一元化され、古社寺保存法(1897年(明治30))において有形文化財に関する制度が制定された。だがこの法律は、社寺の古建築物等を保護の対象とした制度であり、社寺の所有物以外については対象とされなかった。また1913年(大正2)に社寺局から分離した宗教局が文部省に移動して文化財は文部省の所管となった。社寺以外の所有物が法的保護を受けるようになったのは、国宝保存法(1929年(昭和4))及び、重要美術品等ノ保存ニ関スル法律(1933年(昭和8))の制定後であった。

特に史蹟名勝天然紀念物保存法に関連する法として「古社寺保存法」を挙げることができる。本法律は1897年(明治30)6月に公布された後、国宝保存法制定により1929年(昭和4)に廃止されるまで実施された、我が国最初の文化財保護に関する法律として位置づけられている。本法律は、史蹟名勝天然紀念物保存法と性質が良く似た法律であるとされている²²²⁾が、同時にその不備も現代²²³⁾においてのみならず、既に法制定以前から指摘されていた²²⁴⁾。

また、萩野仲三郎は、古社寺保存と史跡保存との差に関して、各々の法の適用範囲が古社寺保存(事業)(法)は「動産」のみなのに対し、史跡保存(事業)(法)では「不動産」にも及ぶことだと指摘した²²⁵⁾。このような古社寺保存法の不備な点に関して萩野は、古社寺法の不備を補ったのは史蹟名勝天然紀念物保存法の中の「史蹟」の部分であると述べた^{226)・227)}。古社寺保存法に関しては、その第19条において名所旧跡に対する「文化財」としての保護措置が明文化されたが、法律名称の示す主旨と異なる旨の批判や経費の関係から事実上機能する事は無く²²⁸⁾、具体的な名勝地への施策はなかった²²⁹⁾。土地に関する文化財の問題の議論²³⁰⁾として現代にまで影響を及ぼしている。

このように、古社寺保存法で扱うことができる「神社の」ものは、所有する美術品や宝物並びに建造物に主眼が置かれており、「空間」や「場所性」といった価値に対する認識は明確でなかったと考えられる。そのため樹林空間や参道の並木などに対しては法による保護指定を行うことができなかった。即ち、古社寺保存法と史蹟名勝天然紀念物保存法とでは、「神社」という共通した空間に対して「保存」を考えて指定を与える法制度であったことは事実としても、前者には「社叢」にかかわるような対象の保存に対して、具体化に至るまではっきりした認識はなされていなかったといえる。

一方1897年(明治12)、内務省地理局から分離独立して山林局が設置され、官林が国家財産的な性格を持つ姿勢が明確に打出された²³¹⁾。この政策の下、官林地に編入された社寺境内地が公園地として提供された。ここに天然紀念物保存と林野政策の間に交錯点を見出すことができる。

表-13 文化財保護の発展と流れ
Table 13. The transitions of the Cultural Properties Protection.

西暦	和暦	内容
1694	元禄7	法隆寺宝物の江戸出開帳。
1842	天保13	法隆寺宝物の江戸出開帳。 ※信仰の拡大と荒廃した伽藍修理の費用の確保を目的として江戸の本所回向院で行われる。 文化財保護の国家制度ではない。
1871	明治4	古器旧物保存法 我国初の文化財保護政策 政府は全国的に伝世の古器旧物を保全すべきことを通達するとともに各地方官庁で品目、所蔵人を調査のうえ政府に報告するよう指令した。 古器旧物類を31の部門に分類。この分類は後世博物館の列品分類の基準ともなる。
1878	明治11	米国人フェノロサは東京大学の顧外国人教師として来日し、日本の古美術の調査と収集を行い、古美術鑑賞の啓蒙的役割を果たす。
1888	明治21	臨時全国宝物取調局が宮内省に設置される。 九鬼隆一が責任者となり、岡倉天心らが中心となり10年間にわたり全国の古社寺を中心に宝物の調査が行われた。
1889	明治22	東京の図書寮付属博物館を帝国博物館に改める。
1895	明治28	奈良帝国博物館、明治30年に京都帝国博物館が開館する。
1897	明治30	古社寺保存法 我国の文化財保護制度の原型をなす制度 建造物及び宝物類の維持修理が不可能な古社寺に対して保存金の下付の出願を法定し、その修理に対し地方長官の指揮監督権を定める。 社寺の建造物及び宝物類で特に歴史の證徴又は美術の模範となるべきものを内務大臣が特別保護建造物又は国宝の資格あるものと定めることができるとした。 特別保護建造物又は国宝は処分、差押の禁止、監守義務、国宝の博物館への出陳義務、刑罰等が定められた。
1919	大正8	史蹟名勝天然紀念物保存法 建造物、美術工芸品が古社寺保存法で保護されているのに対して、史蹟や天然紀念物を破壊から保護するために制定された。 適用する史蹟名勝天然紀念物は内部大臣が指定し、保存に関し地域を定めて一定の行為を禁止又は制限し又は必要な施設を命ずることができる。 内務大臣は地方公共団体を指定して史蹟名勝天然紀念物の管理を行わせる。 現状変更等の制限及び環境保全命令の規定、違反に対する罰則を設ける。
1929	昭和4	国宝保存法 旧大名家が所蔵する宝物類が散逸する等の事態をさけるためや、旧幕府体制の崩壊後放置されていた城郭建築等の古社寺以外の文化財の保護の必要性などから国宝保存法が制定され、古社寺保存法は廃止される。 建造物、宝物その他の物件で特に歴史の證徴又は美術の模範となるものを主務大臣が国宝に指定することができるとし、古社寺保存法の特別保護建造物又は国宝は国宝保存法で国宝に統一される。 社寺有以外の絵画、書跡等も指定が進められる。 国宝の輸出又は移出は禁止される。
1933	昭和8	重要美術品等ノ保存ニ関スル法律の制定 現に生存する者の製作に係るもの、製作後50年を経過しないもの及び輸入後1年を経過しないものを除いて、歴史上又は美術上特に重要な価値があると認められる未指定物件の輸出又は移出は主務大臣の許可を要することとされる。
1943	昭和18	第二次世界大戦中、重要美術品等の認定や名勝、天然紀念物の指定の事務が停止される
1945	昭和20	終戦直後、指定・認定の事務が再開される。戦後の経済的な疲弊と混乱、農地改革や華族制度の廃止などの社会的変革と敗戦による価値観の急激な変化などがあいまって、文化財の散逸や海外流出の危機的状況が続いた。

表-13 文化財保護の発展と流れ(続き)
Table 13. The transitions of the Cultural Properties Protection.

西暦 和暦	内容
1949 昭和24	<p>法隆寺金堂火災が発生し、壁画が焼失する事態が発生。 参議委員文部委員で作家の山本有三議員らが中心に新立法検討の動きが本格化する。</p>
1950 昭和25	<p>文化財保護法制定 国法保存法、史蹟名勝天然紀念物保存法の保護対象を文化財の概念に包摂して統一的な保護法の下に置き、されに無形の文化的所産で歴史上又は芸術上価値の高いものも文化財として保護の対象に加えた。また、土地に埋蔵されている文化財についても法律による保護の対象とした。 文化財保護法は有形文化財のうち重要なものを重要文化財とし、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物に国が指定する。 指定物件の増加にともない保護の措置が十分に講じなくなっていることの対応として、重点保護を講じるための制度として、二段階指定制度が採用される。 国指定の重要文化財及び史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを国宝並びに特別史跡、特別名勝及び特別天然記念物に指定することができるとした。</p>
1954 昭和29	<p>文化財保護法の第一次改正 重要文化財について特に必要な場合に限り地方公共団体その他の法人をこれに指定して保存のために必要な管理のほか、修理、公開についても義務と権限を有するものとした。 無形文化財の指定制度を設け、状況に応じて助成措置を講ずることができるように改めた。指定に当たってはわざを体現している自然人である保持者の認定をあわせて行うこととされた。有形のものについては重要民俗資料の指定制度を新設し、無形の民俗資料については記録選択の制度をもうけた。</p>
1975 昭和50	<p>文化財保護法の第二次改正 昭和30年代後半から40年代にかけて高度経済成長期を迎えると社会構造に大規模な変動が生じ、文化財を支える社会基盤、生活基盤の激変が広汎に進行していった。 建造物その他の有形の文化的所産で価値の高いものと「一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件」を含めることとし、及び「学術上価値の高い歴史資料」が含まれることを明定した。 新たに社団法人、任意団体を保持団体として認定する途を開いた。 「民俗資料」を「民俗文化財」に改めた。旧法の規定により指定された重要民俗資料を新法の重要有形民俗文化財とみなした。また、無形の民俗文化財について新たに国の指定制度を設けた。 国及び地方公共団体に対して埋蔵文化財の周知の徹底についての努力義務規定が新設される。公的な法人が行う発掘については文化庁長官に対する通知及びこれに基づく協議等の特例的取扱いが制度化される。重要かつ調査の必要があると認められる遺跡・必見に、文化庁長官がその現状を変更する行為の停止、禁止の命令を発することができる。 地方公共団体が行う埋蔵文化財に対する業務を明確化。 伝統的な建造物群の景観保存の動きが起こる中、ヨーロッパにおける歴史的街区のファサード保存の手法を参考にした伝統的建造物群保存地区の制度が新設される。 文化財的価値を有する集合体をその環境を含めて一体的に保護する広域保護の制度で、新しい文化財保護の体系を創設したもの。この制度の基本には住民が現に居住する集落町並を保護対象とする点で他の制度と根本的に異なるものである。 文化財保存技術の保護制度の新設、都道府県文化財保護審議会等</p>
1996 平成8	<p>文化財保護法の第三次改正 指定基準の見直しや文化財登録制度などの保護手法の多様化が提言される。 登録文化財制度の創設 建造物のうち国及び地方公共団体が指定した文化財以外のもので保存及び活用の措置が特に必要とされるものを文部大臣が文化財登録原簿に登録する制度が創設される。 指定都市等への権限の委任等</p>

(『文化財保護制度概説』中村賢二郎著 ぎょうせい)を参考及び引用

だがそもそも、両者の「社寺林」に対する捉え方・思想的立場は異なり、単純な比較や対立の図式で説明することはできない。つまり史蹟名勝天然紀念物保存の立場から捉えるとき、社叢は三好学が「総べて神社仏閣の境内にある所の植物は、古代から完全に保存されて来て居ます²³²⁾」としたように、天然状態を保存されて来た場所であるという捉え方であるが、それとは異なり、山林局側では「社寺領は古来、神宮・寺院の造営・修理、あるいは祭祀料・仏事供料、その他神官・僧侶に関する諸費用に充てるため、各社寺が保有した所領である²³³⁾」として、管理・経営の対象として認識していた。

また神社の樹林空間に対する表記方法も両者で異なる。つまり「森林法」では「社寺林」と表現し、「史蹟名勝天然紀念物保存法」では「社叢」と表現された。山林局側から見ると「樹木が生茂っている空間」が重要なのであり、「社」と「寺」を分けて説明する理由がなかったことが伺える。『『保管』『保護』する場である²³⁴⁾』という表現も、それは財を生む場所として『保護』すべきであり、安全面を確保するために『保管』すべきという意味から使用したものであった。ただし、既に1892年（明治15）内務省明治十五年八月二日内務省達番外²³⁵⁾において、境内地を「社寺の尊厳を維持し風致を保つ」場だとする記述がある点も注目され、山林局の姿勢は別途検討の必要が残されている。

4.3.2. 史蹟名勝天然紀念物保存の検討期における「社叢」の概念

1) 史蹟名勝天然紀念物保存法制定以前

法制定に至る時期に雑誌『史蹟名勝天然紀念物』に記事を寄せていた人々は、社叢に対してどのような意識や位置づけを抱いていたのだろうか。神保小虎は「古き建築物及び神社などの宝物には政府の保護を加ふる事多し、此等は史跡保存の事に属し、人造紀念物の保護なるが、尚は天然の名勝地保護という語あり²³⁶⁾。」として「(天然の)名勝地」としてこの空間を位置づけていた。白井光太郎は、「社叢」という言葉を用い、「史蹟」「名勝」「天然紀念物」を兼ね備えている場所が多くあるとして当初「史蹟」と位置づけていた²³⁷⁾。但し「社木」は「天然紀念物」であると位置づけていたことが「其社木は即ち建国以来の天然紀念物」という記述から推定できる。また、三好学は「従来紀念的に日本に長く存在して居るもの、實例を挙げて見ますと、我邦には誠に都合の好いことは神社仏閣があることで、古来是が樹木の保存上には大なる効力がありました²³⁸⁾。」として『『紀念』植物の保存』に有効な場所として位置づけていた。

2) 史蹟名勝天然紀念物保存法制定時

史蹟名勝天然紀念物保存法の制定過程では、神社の中における樹木にかかわる場所については、主として天然紀念物の分野として位置づける動きが見てとれる。法の制定に至るまでの草案から制定、新法移行等による位置づけの変化に着目すると以下の点を指摘できる。まず、草案に至る前段階として着目できる内容が1915年（大正4）「天然紀念物保存事業の組織」²³⁹⁾という記事の中に認められる。そこでは天然紀念物保存事業の対象を項目に分けて挙げているが、この段階で「社叢」という言葉は用いられていない。強いていえばいくつかの項目において空間として森林を捉える動きがみられるが、特段に神社の森の空間に目を向けている内容は確認されない。

だが1918年（大正7）2月に掲載された「史蹟名勝天然紀念物保存要綱草案（續）」²⁴⁰⁾の中にはその一要目目に「塚樹、社叢、著シキ並木」として「社叢」の要目が認められる。二要目目は「名山ニ於ケル植物帯、原始林」、三項目目は「名木、巨樹、老樹」であった。この時点で既に「社叢」は「原始林」などの他の森林とは別項目として扱われている。そして、翌年制定された

「史蹟名勝天然紀念物保存法」²⁴¹⁾の中においては、天然紀念物の植物の一要目の第一番目に「一、社叢、著シキ並木、名木、巨樹、老樹」として規定された。草案では「社叢」と同項目に記載された「塚樹」の要目が削除され、「名木、巨樹、老樹」が「社叢」と同じ要目に並べられた。そして1951年(昭和26)に告知された「特別史蹟名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」では、天然記念物の植物の第一要目に「一、名木、巨樹、老樹、畸形木、栽培植物の原木、並木、社叢」と規定されている。なお現法では、前法と同じく一項目目という点は変化していないが、筆頭から末尾に記載順序が後退している。社叢以外の要目がいずれも単木である点や、記載順序が後退した点を考察すると、「社叢」の扱いになんらかの議論があった様子が伺える。しかも単木を重視する姿勢が強まっている傾向も、既往研究による指摘^{242)・243)}と併せて示唆される。だが、それでも「社叢」という要目自体が削除されたり、他の要目に組み込まれるというようなことは起こらなかった。

現在までに「社叢」として指定されている18件中、現法が施行された1951年以降に6件(昭和42年1件、昭和50年2件、昭和53年1件、昭和55年2件)の指定がなされている²⁴⁴⁾点からも、単に前法で指定された地域を存続するために要目の削除を行わなかったとは考え難い。

また「名勝」の項に着目すると、要綱草案時においては「四、著明ナル神社仏閣其他ノ建築物及其境内」という要目が認められるが、保存法制定時にはその要目が削除され、「名勝」の範疇において神社境内を個別に独立して扱う要目はなくなった。従ってこのことから史蹟名勝天然紀念物保存法で社叢を含めた神社境内の空間は「天然紀念物」として位置づけられることが規定されたと考えられる。

3) 史蹟名勝天然紀念物保存法制定後

「社叢」は「天然紀念物」の一項目として要目を与えられた。だが実は神社の樹木や樹林に対しては、「原始林」「社叢」「並木、巨樹、老樹」の指定の種類が存在した。吉澤庄作は、富山県史蹟名勝天然紀念物調査委員として越中宮崎鹿島社叢の調査を行い、1936年(昭和11)に誌上に報告している^{245)・246)}。この中で吉澤は、「社叢」の他に「林叢」「樹叢」という言葉を用いている。彼が意識的に使い分けたのか、適当に使ったかだけなのかは文面から窺い知ることができない。だが「植物学上優れている」ことを述べ「人為を禁じた場だから価値あり」「この状態を守らねばならぬ」という点から主張を展開したことは事実である。結局吉澤によってなされた「『社叢』を調査した報告」の結果を反映してこの地が「社叢」として天然紀念物に指定されることはなかった。その後この地は1936年(昭和11)宮崎鹿島樹叢という名称で「植物二、代表的原始林、稀有の森林植物相」の要目として指定²⁴⁷⁾されるに至った。

法制定後20年目である1941年(昭和16)には、田阪美徳が神社境域と天然紀念物指定に関して数量的な分析を行った²⁴⁸⁾。田阪は「原始林」「社叢」の指定数をそれぞれ分けてそれらの割合を出しているが、結局「原始林、原始的樹叢、原始的樹林の総計」とひとまとまりにして分析を行っている。「並木、巨樹、老樹」とその他の性質が違うことは明確だとしても、「原始林」か「社叢」か、どちらで指定するのかを判断する根拠やその差を意識する姿勢はここからは読みとり難い。また誌上では、保存法で指定された箇所に対してその指定理由を解説する記事も掲載されている。「社叢」としての初めての指定がなされたのは1928年であり、同年4月にはそれに対する指定理由に関する記載²⁴⁹⁾がみられるが、その説明からも明確に社叢とその他の森林を区別する根拠に当たる記述は認められない。以上のことから、法律で「社叢」を要目に据えることが決定し指定理由が明示された後も、社叢の位置づけに揺れがある様子が見てとれる。「要目一」に

属する社叢に対する空間認識と「要目二」に対するそれとの差異が明瞭でないことにその原因を推測できる。

4.3.3. 「社叢」と白井光太郎

1) 史蹟名勝天然記念物調査会の組織

史蹟名勝天然記念物調査会は、会長・委員・臨時委員・幹事・考査員・書記から構成された。その組織については、史蹟名勝天然記念物調査会官制²⁵⁰⁾で定められていた。

高等官と学識経験者からなる定員20名以内の委員と定員外の臨時委員が調査・審議を行った。調査の実務は学識経験者から任命される考査員によって行われた。事務は幹事と書記が担当した。法の対象が多岐にわたるため、委員・臨時委員・考査員には生物学・歴史学等、様々な分野の人物が任命された。

会長は歴代の内務大臣が就任した。調査会が内務省における史蹟名勝天然記念物についての事実上の最終的な決定機関として機能していた。委員・臨時委員と考査員は学識経験者と官僚であった。委員・臨時委員は帝大教授もしくはそれに準ずる立場の人々であった。一方考査員の多くは若手研究者で実際の調査の中心となった。

2) 白井光太郎の解釈

史蹟名勝天然記念物保存法の制定過程における重要人物、特に植物に関する天然記念物保存に関しては三好学（1861-1939）の名字が度々挙げられる^{251)・252)}。実際彼が雑誌『史蹟名勝天然記念物保存』において果たした功績は大きく、『天然記念物解説』²⁵³⁾が三好著作で出版され、『天然記念物調査報告』²⁵⁴⁾の調査者の筆頭に彼の名を挙げていることなどからも、中心となって動いた人物であることは明らかである。同様に誌上においても神保がこの点を記している²⁵⁵⁾。

しかしながら三好自身が「社叢」という言葉を用いたかといえ、実際はそうではなかった。彼は、誌上でこれを指す内容を述べる際には「神社仏閣の境内」「神社仏閣の境内にある所の植物」「社寺の森林」²⁵⁶⁾という表現を用い、「社」と「寺」を分けて記述することはなく、社叢という言葉も用いなかった。そもそも三好が所謂「社叢」を対象にして記事を寄せたのはこの一編のみであり、他の大多数は桜や桜草等自らの研究対象に関する記事や天然記念物保存全般に関する内容であった。この空間に対する重要性を認識していたことは間違いないとしても、格別に「社叢」という言葉に対して思い入れが深かったとは思えない。つまり、三好としてはあえて「神社の」森である「社叢」と記せずとも、例えば社寺林などという言葉も用いてこの空間に対する要目を設定したとしてもさほど気にしなかったのではないかと推測できる。1921年（大正10）の記事²⁵⁷⁾では、「一、社叢、並木、名木、巨樹、老樹」の「社叢」に対する解説として「（前略）半ば天然林の観を成せるものもあり。」「此の如く社叢には往々昔時の樹木保存せられ、（中略）学問上の考證として貴重なるものあり。」「社叢を形づくれる樹木（中略）天然の儘保存するを要す。」という記述が見られ、次の「二、代表的原始林、稀有の林相」の要目では「固有の林相を呈し学術上の考證となり」「森林を形づくれる樹木の種類の珍奇なるもの、又は種類の甚だ多きもの、或は発生の固有なるもの等」と解説している。これらを見るに「代表的原始林、稀有の林相」の解釈の内容の中に「社叢」の概念を含める、もしくはこの要目の中に「社叢」を含めることも可能ではなかったかと考えられる。

つまり三好の解釈では、「社叢」の要目としての必要性は高くなかったのではないかと考察される。実際三好によって著された『天然記念物解説』²⁵⁸⁾中、「社叢」の具体例として春日神社境

内なぎ樹林と、福岡八幡神社の樹叢の2例が挙げられているものの、そのどちらも社叢として指定されることはなかった(春日神社境内なぎ樹林は「代表的原始林、稀有ノ林相」の要目として指定を受け、福岡八幡神社の樹叢は指定を受けなかった)。

「社叢」という言葉の使用に関しては三好以外の人物に着目する必要がある。雑誌『史蹟名勝天然紀念物』の記事の中で「社叢」という言葉を用いてその重要性を述べている人物は白井光太郎であった。白井光太郎(1863-1932)は、福井藩出身の植物病理学者で、東大理卒、ドイツ留学などを経て東大教授、日本植物病理学会初代会長(大正7)を務めた人物である。白井は日本の植物学、特に本草学分野において重要な役割を担った人物として認識されており考古学にも造詣が深い人物として知られている。それと同時に彼は史蹟名勝天然紀念物保存においても協会発足時から中心的人物として活躍し、同誌上に度々執筆し数多くの講演を行った。保存調査の中心となった調査者、調査報告書執筆者としても白井の名が挙げられており²⁵⁹⁾、法制定時にも発言力を持った人物であったことが推察できる。

初期の頃でこそ神保小虎や黒板勝美なども「社」と「寺」に優先順位をつけると共に神社合祀に異を唱える記事を寄せている^{260)・261)・262)・263)}が、それ以降では白井が発表したものが殆どであった。従って1932年の白井の死去後、社叢の意義を熱心に説く者は誌上にはみられなくなった。「神社仏閣」「社寺」を扱った話題は非常に少なくなり、全般的に記事自体が減少していることに加え、たとえ掲載がされたとしても「森」や「天然紀念物」に直接関わるものではなく、国粹的な思想に関する記事^{264)・265)}が目立っていった。従って時代を経るにつれ「社」か「寺」かどうかは既に論点ではなくなっていくのである。

白井は誌上において神社の発生を説明し、森林の重要性を示した²⁶⁶⁾。また彼は併せて神社合祀を明確に批判し、除地拂下げや神社合併、耕地整理などから守るためにも保存協会が始まると説いた^{267)・268)}。これらの文面から、白井は史蹟名勝天然紀念物保存協会発足当時からこの姿勢で臨んでいたことが伺える。また彼は、神社の森は信仰上発生したことを説き、これを明確に意識しており²⁶⁹⁾、神社合祀反対の態度を明確に記述し「社」と「寺」を分ける姿勢を明らかにした。この頃、南方熊楠や柳田國男と頻繁に交際しており、書簡のやり取りや電話での話し合いも行われていた^{270)・271)}。白井自身が元来持っていた保守的な思想²⁷²⁾に加え、彼等との交流やそれらの活動を通して、神社合祀反対の姿勢を強固なものにしていった²⁷³⁾。また実際提出するには叶わなかったが、明治45年に「神社合祀の弊害に関する建議案」²⁷⁴⁾を作成し強固に神社合祀に異を唱えた。彼が示した合祀反対理由は7項目に上ったが、その第2項目目に史蹟名勝天然紀念物保存の側面から反対を唱えている。さらに白井は他雑誌誌上においても神社合祀反対や神道に関してその有意義を熱心に述べた。なお「日本及日本人(明治44年10月)」誌上では「社叢」という表現は使わず、「神林」「神社神森地」という表現を用いた²⁷⁵⁾。

白井が神社合祀を強固に反対する姿勢を見せた時期、また彼が柳田國男や南方熊楠と頻繁に文書をやり取りし彼等との交流を深めた時期、さらには史蹟名勝天然紀念物保存法制定に向けて活動していた時期、これらは全て明治末から大正初期に係る時期として一致している。白井は学識者として史蹟名勝天然紀念物保存に関わる一方で、柳田や南方らのような後にいう文化財行政の「制度」に収まらない人物達に共感し意を同じくする姿勢を見せていたといえるのではないだろうか。

上記した通り、白井が「社叢」という言葉を用いずにこの空間を表現する時には「神林」「神社神森地」という表現を用いた。一方で三好は「社寺境内地の森林」という表現を用いた。この

ことは両者の「社叢」に対する認識の違いを表しているといえる。白井が死去した際、誌上に寄せられた記事中²⁷⁶⁾には、白井が神社合祀反対論者であったことに関する記述は一切出て来ない。特に彼の人となりを回顧した三好学の文²⁷⁷⁾の構成は、最初の2/4が植物学者（本草学）としての白井について、続く1/4が天然記念物保存委員としての白井について、最後の1/4が彼の性格趣味について述べられたものであった。意識的に避けられたか、三好の関心の範疇になかったからかは判断しかねるが、そのどこにも神社合祀反対、社叢の重要性を説いた人物としての記述は認められなかった。

このように三好には「社叢」に対するこだわりを見てとることはできない。事実として日本における原始林・巨樹・老樹の生育場所の幾つものが神社の空間であるという視点から、彼は優れた調査地の一つという捉え方でその空間を捉えていたと推測される。従って直接「神社」の空間である「社叢」を全面に押し出さなくてもかまわなかったのではないかと考えられる。

それに対して白井はあくまでも「神社」の空間であることにこだわりを持っていた。それを表す「社叢」という言葉を採用することは彼にとっては重要であったと考えられる。つまり白井の着目するところは「神社」に存在する樹林であり、ゆえに「寺」とは区別する姿勢を示すと共に「社叢」に対してこだわりを見せた。従って天然記念物保存委員であるにもかかわらず、この空間に対し「名勝史蹟と天然記念物を兼ねたもの」「史蹟、名勝、天然記念物の三者を兼備」「史蹟の中で重要な」というように「史蹟」「名勝」「天然記念物」のいずれに属するかに対して柔軟な姿勢が見受けられる。この点に関し一方で三好にとって重要なのは、「天然記念物」としての位置づけであり、その空間が「神社」なのかそうでないのかという点はさほど重要ではなかった。ここに白井と三好の立脚点の違いが見てとれる。

従って、三好が純粋な植物学的見地に立っていたとすると白井はそれを超えた包括的な概念を社叢に対して抱いていたと推測できる。互いに植物を専門とする学者同士であるにも関わらず、白井にはその場が持つ精神性や空間性など、植物学的見地からだけでは説明できない部分にも重要性を持っていた点、さらにそれが法律上に位置づけられた点に「社叢」の面白さがある。

だがこの意見を強く主張し続けたのは白井以上に現れなかったため、法制定数十年後、白井の活動が衰微した頃になると、社叢は「植物学的」、あるいは今でいうところの「生態学的」に価値がある場所という側面のみが重視される傾向が強まってきた。元々この側面から主張をしていた三好自身が老齢となった後にもこの側面の主張が強まり続けたのは、三好が後輩の指導教育に対して非常に熱心だったこと²⁷⁸⁾が挙げられるだろう。史蹟名勝天然記念物保存協会の中心になって委員や調査を行った人物の中に中野治房や吉井義次が挙げられるが、彼等は三好学と師弟関係にあった²⁷⁹⁾。

4.4. 結論

本章の結論は以下の通りである。

「社叢」という言葉が史蹟名勝天然記念物保存法の要目の筆頭に採用されたのは、史蹟名勝天然記念物保存の動きがあらわれた当初、「社叢」が単なる植物学・生態学上優れた森林としてのみならず、複合された価値を有する場として保存していく必要があるという意識と、当時巻き起こった神社合祀令への反対とが相まった結果であることが明らかになった。

史蹟名勝天然記念物保存法制定時、優れた森林を保存しなければならない、という共通した理念の下、特に社叢にこだわっていた白井光太郎の意思が法の要目の中に反映されたと解釈でき

る。それは、場が持つ精神性や空間性などの履歴が反映された結果物としてその場に存在する植物に対する天然記念物的価値を評価し、「神社の」という点に重きをおく姿勢が反映された結果であると推測される。

しかし時代を経るにつれ、「社叢」という言葉に含まれる意味は変化し、それに対する複合的な意味合いは忘れ去られ、次第に「原始林に順ずる」²⁸⁰⁾森林かつ神社に所属するものを「社叢」として指すようになったと考えられる。「樹叢」という言葉も同様に用いていたことから「樹」が「叢」ている所が重要だと認識していたと考えれば、「神社」の中で「樹」が「叢」ている場合に「社叢」を用いたと解釈され、そこにもはやそれ以上の意味は存在しない。現在の文化財保護行政の中における「社叢」の位置づけの変化は、それに対する概念に様々な意味が含有する「空間」としての認識よりも、合理性を求め曖昧さを嫌う「制度」という枠組みゆえ、単純に優れた「植物」が存在する場としての位置づけを好んだ傾向が時代を経るにつれて強まっていった結果であると考えられる。

第5章 本論文の結論

本研究において明らかにした結果は以下の通りである。

1) 自然に対する神道の空間認識と日本人の自然に対する空間概念の形成

神道の空間認識における「自然」の位置づけの変遷として、初期である神道の発生以前から成立までにおける特徴は、信仰の対象そのものとして直接的関係の空間でありながら客体的でない事であった。それに続く仏教伝来から神仏習合までにおける関係は、「自然」そのものを神道の空間とした関係が崩れはじめた事が特徴的であった。また、神仏習合から本地垂迹説の成立までにおける特徴は、存在としての「自然」から思想としての「自然」へと変化したことであった。その後、近世から近代にかけて神仏習合期から神仏分離令・廃仏毀釈までにおける関係の特徴は、元来の神道の信仰対象であった「自然」に対する人々の意識が薄れ、利用の対象として「自然」が認識されてきたことが示唆された。そして近代に入り公園の出現が見られる時期になると、公園開設にあたって神社の敷地を対象地に指定した背景として神社をそれ自体が「自然」としての意味を持つ空間として認識されていないことが示唆されたが、その後神社合祀期以降の両者の関係において、「自然」に対する位置づけの希薄化と空間自体の減少が促進したこと、並びに従来の結びつきに依らない新たな発想で捉える概念の誕生などが認められた。そして現代における関係の特徴は、元来の「自然」の解釈に対する意識が極希薄となる一方で、今日的な問題に対する「緑地」の解釈の拡充により、現代的な価値観によって扱われる空間と成り得る事が特徴として挙げられた。また、「自然」に対する西欧との比較を行うことで日本人の自然に対する空間認識に関し、「自然」の概念と神道の精神や空間認識は通じるものが多く、言い換えれば「自然」に対する神道の空間認識が日本人の自然に対する空間概念の形成に関与していることが明らかになった。

2) “神社の屋外空間”に対する空間概念の差異

「社叢」「鎮守」「社寺」と「森」や「林」といった語が組み合わせられて用いられる傾向が強まったのは1970年代中盤以降であり、この時期を契機として“神社の屋外空間”を緑地空間として科学的に認識しようとする見方が顕在化してきた事が明らかになった。また、「鎮守の森」や「社寺林」が、元々“聖なる場”や“神社や寺院”などの意味をもつ「ある空間」に対

して自然や緑地といった概念を加えることで成立してきた空間概念であるのに対し、「社叢」は元来からそれ自体に自然や緑地といった概念を含む空間概念であった。

(1)「社叢」は、神社境内内森林の生物生息空間、特に植物生態学的側面に着目する空間概念が強いという特徴を持つ一方、神仏分離政策や国家神道という国策との関わりの中で、社と寺を区別し、あくまで「神道の」自然的場所や緑地としての空間概念として捉えられることが明らかになった。

(2)「鎮守の森」は、古来から地霊をまつる聖なる空間やその神に対して用いられてきた鎮守という語が、生態学的研究対象として地域の本来の潜在自然植生が生育している場所として着目されたことなどにより、科学的・精神的・宗教的・地理的・景観的な側面からの様々な意味づけが可能である空間として位置づけられ発展した結果、神社に限らず郷土性を含有するような自然的場所を想定した空間概念として捉えられていることが明らかになった。

(3)「社寺林」は、明治期から大正期にかけて行われた土地政策や林野政策における森林の位置づけのひとつとして神社や寺院が所有する森林に対して用いられた語であり、経済的側面や機能的側面を有する空間としている点と、行政が何らかの処置を講じる政策上の対象であったという点が特徴であり、機能面や制度に着目した場合や現物の空間を表現する場合の対象となる空間を想定した空間概念として捉えられていることが明らかになった。

3)「社叢」という言葉の意味や使用されてきた意義

「社叢」という言葉が史蹟名勝天然紀念物保存法の要目の筆頭に採用されたのは、史蹟名勝天然紀念物保存の動きがあらわれた当初、「社叢」が単なる植物学・生態学上優れた森林としてのみならず、複合された価値を有する場として保存していく必要があるという意識と、当時巻き起こった神社合祀令への反対とが相まった結果であることが明らかになった。

史蹟名勝天然紀念物保存法制定時、優れた森林を保存しなければならない、という共通した理念の下、特に社叢にこだわっていた白井光太郎の意思が法の要目の中に反映されたと解釈でき、場が持つ精神性や空間性などの履歴が反映された結果物としてその場に存在する植物に対する天然紀念物的価値を評価し、「神社の」という点に重きをおく姿勢が反映された結果であると推測される。

しかし時代を経るにつれ、「社叢」という言葉に含まれる意味は変化してゆき、それに対する複合的な意味合いは忘れ去られ、次第に「原始林に順ずる」森林かつ神社に所属するものを「社叢」として指すようになったと考えられる。「樹叢」という言葉も同様に用いていたことから「樹」が「叢」ている所が重要だと認識していたと考えれば、「神社」の中で「樹」が「叢」ている場合に「社叢」を用いたと解釈され、そこにもはやそれ以上の意味は存在しない。現在の文化財保護行政における「社叢」の位置づけの変化は、それに対する概念に様々な意味が含有する「空間」としての認識よりも、合理を求め曖昧さを嫌う「制度」という枠組みゆえ、単純に優れた「植物」が存在する場としての位置づけを好んだ傾向が時代を経るにつれて強まっていった結果であると考えられる。

お わ り に

本論文で対象にしてきた社叢空間とは歴史的に人間の関与が継続してきた緑地であり、実態的側面と同時に意味の側面も相対的に強い空間である。「緑地」という視点を通して神社の空間を評価することの意義と妥当性を求めるために行ってきた一連の研究を通じて明らかになったことは、神社の屋外空間は緑地としての潜在性が非常に高いということであり、歴史的にみた形成過程や風土の中で培われてきた日本人の自然観など、意味的側面からみると社叢は他の如何なる緑地にも変えがたい価値を有する空間であった。本研究の結果から、社叢という歴史的に評価されうるような樹林がもつ場そのものの重要性は指摘することが出来たのではないかと考えている。

しかしながら、今現在、都市における緑地として社叢がどのように機能しているのかは本研究から明らかにすることは出来ていない。従って、次報においては都市化された空間における緑地としての社叢の現状を分析し、その結果を報告するとともに、本研究で明らかになった意味的側面を加味した緑地としての社叢の評価を行うこととする。

謝 辞

本論文は2006年に東京大学へ提出した学位論文の前半である社叢空間の意味的側面に関する研究の主要部分です。本研究をまとめるにあたり東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻自然環境コースの諸先生方には適切な御指導と暖かい励ましを頂きました。心より感謝申し上げます。

自然環境評価学分野熊谷洋一教授には、修士課程入学以来、本論文の完成に至るまで一貫して御指導頂きました。また、生物圏情報学分野梶幹男教授、農学生命科学研究科下村彰男教授、自然環境評価学分野春山成子助教授、生物圏情報学分野斎藤馨助教授には、本論文をまとめるにあたり副査としての確かな御指摘と御指導を頂きました。心より感謝申し上げます。農学生命科学研究科森林風致計画学の諸先生方には専門的な立場から適切な御指導を頂きました。心より感謝申し上げます。

要 旨

本論文は、2006年に東京大学に提出した学位論文の前半部分であり、後半における現状の実態分析及び評価のための概念整理と位置づけることができる。本研究の立脚点は「緑地」という視点を通して時間的な軸と空間的な軸から社叢空間を捉えようとするところにある。本論文は五章で構成されており、各章は以下の通りに位置づけられる。

第1章においては、本研究の背景と目的ならびに位置づけを明らかにした。まず、問題の所在、本研究に反映させる問題意識を述べ、関連する研究の流れや位置づけを通覧し、それぞれの研究のアプローチ及び方法論を整理することによって、本研究の位置づけを試み、その目的及び方法を明らかにした。

設定した本研究の目的は、社叢を緑地という視点で評価することの意義と妥当性を明らかにすることとし、具体的には

①空間に対する認識の変遷を「自然」との位置づけの関係から分析することで、日本人の自然に対する空間概念形成を明らかにすること

② “神社の屋外空間”を指して用いられる「社叢」「鎮守の森」「社寺林」といった類義語を比較して各々の言葉の意味や意義を分析することにより、同一の空間に対して複数の言葉が用いられる原因とその背景にある意図を明らかにし、神社のオープンスペースに対する緑地の空間概念の差異と特徴を明らかにすること

③法の成立・運用における「社叢」の概念及び位置づけを明らかにすることにより、“神社の屋外空間”と“社叢”の空間概念を明確にすること

以上の3点を研究目的とした。

第2章においては、文献資料調査によって自然・神道・社寺など社叢に関連する歴史や事象及び語彙を明らかにし、本研究において『社叢』を対象とする意図を明らかにした。

まず、自然に対する神道の空間認識と日本人の自然に対する空間概念との関係を明らかにするために、分析対象記事（該当記事 4,159）を文献（該当文献 555）から選出し、神道の空間認識における「自然」の位置づけの変遷や日本人の自然に対する空間の認識の関連を言葉の解釈の変遷や西欧との比較を踏まえて分析した。その結果、日本における自然の概念と神道の精神や空間認識は通じるものが多く、自然に対する神道の空間認識が日本人の自然に対する空間概念の形成に関与していたことが明らかになった。

第3章においては、“神社の屋外空間”を指して用いられる類義語に対し、語彙自体の使用の変遷を明らかにするための書籍・論文出現頻度に関する分析と語彙が想定する対象を広く収集分析する語彙の概念に関する分析を組み合わせることによって、量的側面と質的側面の双方から実態を明らかにし、神社のオープンスペースに対する緑地の空間概念の差異と特徴を明らかにした。その結果、数値分析処理による包括的な傾向として「社叢」「鎮守」「社寺」と「森」や「林」といった語が組み合わせられる傾向が強まったのは1970年代中盤以降であり、この時期を契機として“神社の屋外空間”を「緑」の空間として認識しようとする見方が形成された事が示唆された。また、「鎮守の森」や「社寺林」が、元々“聖なる場”や“神社や寺院”などの意味をもつ「ある空間」に対して自然や緑地といった概念を加えることで成立してきた空間概念であるのに対し、「社叢」は元来からそれ自体に自然や緑地といった概念を含む空間概念であることが分かった。また、各々の言葉が対象とする空間概念の範囲に関しては、「社叢」が指し示す空間概念には神社境内内森林の生物生息空間、特に植物生態学的側面に着目するという空間概念が強いこと、「鎮守の森」が指し示す空間概念には古来から地霊をまつる聖なる空間やその神に対して用いられてきた語が生態学的研究対象として地域の本来の潜在自然植生が顕在化している場所として着目されたことなどにより、神社の空間のみならず精神的・文化的な拠り所という広範囲な解釈として捉えられている空間概念が強いこと、「社寺林」が指し示す空間概念には明治期の土地政策・林野政策の中での位置付けに対して用いられた歴史を経て、機能面や制度に着目した場合や現物の空間を表現する場合の対象となる空間に対して求められた空間概念が強いことが示された。

第4章においては、「社叢」という言葉の意味や使用されてきた意義を明らかにするために、雑誌史蹟名勝天然記念物における全記事中、社叢・神社・社寺・及び関連記事を選出して分析対象とし、史蹟名勝天然記念物保存法の成立・運用の過程における社叢というものの位置づけや、社叢という言葉の使われ方の変遷を分析した。その結果、「社叢」が史蹟名勝天然記念物保存法の要目の筆頭に採用されたのは、単に植物学・生態学上優れた森林としてのみならず、社叢を複合された価値を有する場として保存していく必要があるという意識と、当時巻き起こった神社合祀

令への反対とが相まった結果であることが明らかになった。更には、その後時代を経るにつれ「社叢」という言葉に含まれる意味は変化してゆき、それに対する複合的な意味合いは消え忘れられ、次第に原始林に準ずる森林かつ神社に所属するものを「社叢」として指すようになったことが明らかになった。

第5章では、第2章から第4章の結果をまとめるとともに本研究の結論を述べた。

以上の研究から本論文では、神社の屋外空間に対する空間概念を明確化しその空間を表現するに相応しい語彙が示されたことで、意味的側面から神社の空間を緑地という視点で評価することの意義と妥当性を明らかにした。

なお次報においては、都市における社叢の実態を明らかにするために、東京都区部を対象にマクロ・メソ・ミクロの異なる3つの空間スケールを設定し、現地調査と数値情報をもとにGISを用いて定量的に都市の社叢を分析した研究結果を著すると共に、本研究における結論を述べる。

キーワード： 社叢・緑地・自然・空間・意味的側面

引用文献・注釈

- 1) 藤田直子・熊谷洋一(2004)東京都心部のランドスケープ変化と樹林地の偏在性に関する研究。ランドスケープ研究 67 (5) : 577-580.
- 2) 上田正昭・上田篤(2001)鎮守の森は甦る 社叢学事始。(思文閣出版、京都)。3-33.
- 3) 宇杉和夫(2003)日本の空間認識と景観構成 ランドスケープとスペースオロジー。(古今書院、東京)。p6.
- 4) ノルベルグ・シュルツ(1973)実存・空間・建築。(鹿島出版会、東京)。p13.
- 5) 桑子敏雄(2002)環境と国土の価値構造。(東信堂、東京)。192-193.
- 6) 石井研士(2002)メディアの中の明治神宮—テレビは神社に何を求めているか。明治聖徳記念学会紀要 36 : 1-58.
- 7) 林業経営研究所編(1972)都市林。(農林出版、東京)。p92.
- 8) 同上。p93.
- 9) 2002年10月上田正昭らによって、鎮守の森などについて調査研究を進め、地域に密着した新しい学問の創造と社叢の保存・開発をめざし「社叢学会」が設立された。
- 10) 網本逸雄(1999)「鎮守の森」という言葉について。植生史研究 7 (1) : 39 - 41.
- 11) 加藤晃規(1984)鎮守の森の総合評価とその保存・修景景観に関する研究 - 滋賀県と大阪府における事例研究 -。日本都市計画学会別冊 20 : 337-342.
- 12) 渡辺弘之(2001)緑の回廊が動物を豊かにする。社叢とは何か。鎮守の森は甦る 社叢学事始(思文閣出版、京都)。155-170.
- 13) 同上。p12.
- 14) イーファー・トゥアン(1993)空間の経験。筑摩書房、東京。
- 15) 同上。p271.
- 16) 法律で用いられる緑地の定義は、表-14の都市公園法、表-15の都市緑地法のとおりである。
- 17) 日本公園百年史刊行会編(1978)日本公園百年史。日本公園百年史刊行会。p82.
- 18) 宇杉和夫(2003)前掲。
- 19) 興水肇・熊谷洋一(1985)多様化する造園研究。造園雑誌 48 (4) : 250-255.
- 20) 日本造園学会情報化小委員会(1991)造園雑誌論文データベースを用いた造園研究動向の解析。造園雑誌 55 (2) : 192-197.

表-14 緑地の定義(都市公園法)
Table 14. The definition of *Ryokuchi* (in City Park Law).

都市公園法 (昭和三十一年四月二十日法律第七十九号)	
第一章 総則	
(定義)	
第二条 この法律において「都市公園」とは、次に掲げる公園又は緑地で、その設置者である地方公共団体又は国が当該公園又は緑地に設ける公園施設を含むものとする。	
一 都市計画施設(都市計画法(昭和四十三年法律第百号)第四条第六項に規定する都市計画施設をいう。次号において同じ。)である公園又は緑地で地方公共団体が設置するもの及び地方公共団体が同条第二項に規定する都市計画区域内において設置する公園又は緑地	
二 次に掲げる公園又は緑地で国が設置するもの	
イ 一の都府県の区域を超えるような広域の見地から設置する都市計画施設である公園又は緑地(ロに該当するものを除く。)	
ロ 国家的な記念事業として、又は我が国固有の優れた文化的資産の保存及び活用を図るため閣議の決定を経て設置する都市計画施設である公園又は緑地	

都市公園法(1956年)

表-15 緑地の定義(都市緑地法)
Table 15. The definition of *Ryokuchi* (in Urban Green Space Law).

都市緑地法 (昭和四十八年九月一日法律第七十二号)	
第一章 総則	
(定義)	
第三条 この法律において「緑地」とは、樹林地、草地、水辺地、岩石地若しくはその状況がこれらに類する土地が、単独で若しくは一体となつて、又はこれらに隣接している土地が、これらと一体となつて、良好な自然的環境を形成しているものをいう。	

都市緑地保全法(1974年)

- 21) Naoko FUJITA, CHONG, Soo-jin, Yoichi KUMAGAI, Akio SHIMOMURA (2004) Comparative Study on Themes of Research papers on the Research Trends of parks and Green Spaces in Japan and Korea. Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture. International Landscape Architecture of Korea, China and Japan. International Edition Number 2. 81-87.
- 22) 深町加津枝(2000)農村空間における生物相および景観の保全に関する最近10年間の研究動向. ランドスケープ研究 63 (3): 178-181.
- 23) 倉本宣・本田裕紀郎・園田陽一(2001)我が国における生物多様性保全に関する研究動向. ランドスケープ研究 64 (4): 288-293.
- 24) 高橋ちぐさ・下村孝(2002)雑誌・書籍の出版動向及び記事内容から見たガーデニングブームの実態. ランドスケープ研究 65 (5): 397-400.
- 25) 平澤毅(2004)ランドスケープ近代化遺産を考えるー「風景」と近代化. 文化財の保護と近代のランドスケープ遺産. 平成16年度日本造園学会分科会: 42-47.
- 26) 亀井幹夫・中越信和(2002)天然記念物制度による植物保全の効果. ランドスケープ研究 65 (5): 427-430.
- 27) 亀井幹夫・中越信和(2001)国指定天然記念物(植物)の指定方針とその変遷. ランドスケープ研究 64 (5): 391-396.
- 28) 赤坂信(1998)戦前の日本における郷土保護思想導入の試み. ランドスケープ研究 61 (5): 401-404.

- 29) 児玉幸多編(2004)日本史年表地図, 吉川弘文館, 東京.
- 30) 藺田稔(1988)神道 日本の民族宗教, 弘文堂, 東京.
- 31) 宮崎博生(2001)神道史概説, おうふう, 東京.
- 32) 鎌田東二(2000)神道とは何か, pHp 研究所, 東京.
- 33) 保坂幸博(2003)日本の自然崇拜, 西洋のアニミズム, (新評社, 東京), p4.
- 34) タイラーによる説, 生きているものだけに留まらず, 存在しているものは全て何らかの状態の靈魂を持っているとする, ヒエラルキーでピラミッドの頂点がキリスト教(自然を克服)だとすれば, 自然崇拜は底辺であると説明される.
- 35) 保坂幸博(2003)前掲, p4.
- 36) ヒエラルヒー(独語 Hierarchy), 位階制, 身分階層制とも, 上下関係によって, 階層的に秩序づけられたピラミッド型の組織の体系, 狭義では, カトリック教会の教皇を頂点とする聖職者の位階制, 広義では, 中世の封建社会の身分秩序をさすが, 現代では指揮・命令系統によって整序された軍隊や官僚機構についていう, (大辞泉).
- 37) 神宮司庁(2001)神道を知る本, (おうふう, 東京), p111.
- 38) 同上, p17.
- 39) 河野訓(2004)神道史大辞典 藺田稔・橋本政宣編, (吉川弘文館, 東京), p543.
- 40) 上田正昭(2003)身近な森の歩き方 鎮守の森探訪ガイド, (文英堂, 東京), p192.
- 41) 同上.
- 42) 同上.
- 43) 藺田稔(2004)神道史大辞典 藺田稔・橋本政宣編, (吉川弘文館, 東京), p677.
- 44) 藺田稔(1988)前掲, 2-4.
- 45) 仏の悟った真理, 仏の説いた法, 仏道, (大辞泉).
- 46) 藺田稔(1988)前掲, 2-4.
- 47) 河野訓(2004)前掲, p543.
- 48) 同上, p524.
- 49) 神宮司庁(2001)神道を知る本, (おうふう, 東京), p17.
- 50) 同上, p22.
- 51) 同上, p111.
- 52) 藺田稔(1988)前掲, 203-204.
- 53) 河野訓(2004)前掲, p524.
- 54) 神宮司庁(2001)前掲, p112.
- 55) 河野訓(2004)前掲, p543.
- 56) 神宮司庁(2001)前掲, p111.
- 57) 瓜生中(2002)神社の古代通史, 歴史読本 11, p163.
- 58) 桑子敏雄(1999)西行の風景, (日本放送出版協会, 東京), 192-194.
- 59) 宮田登・山折哲雄・渡部昇一・松田義幸(1996)自然の恵みと日本の神々, 神々の風景と日本人のころ, (pHp 研究所, 東京), 51-71.
- 60) 同上.
- 61) 同上.
- 62) 三宅正彦(2000)安藤昌益の本覚思想(上)ー神仏習合と自然の神道ー, 日本宗教文化史研究4(1):1-19.
- 63) 三宅正彦(2000)安藤昌益の本覚思想(中)ー神仏習合と自然の神道ー, 日本宗教文化史研究4(2):1-19.
- 64) 三宅正彦(2001)安藤昌益の本覚思想(下)ー神仏習合と自然の神道ー, 日本宗教文化史研究5(2):1-22.
- 65) 宮元健次(2001)図説日本建築のみかた, (学芸出版社, 東京), p61.
- 66) 河野訓(2004)前掲, p543.
- 67) 三省堂「大辞林 第二版」.
- 68) 真言宗の立場からなされた神道解釈に基づく神仏習合思想, 真言密教で説く胎藏界・金剛界の両部をもって, 日本の神と神, 神と仏の関係を位置づけたもの, その萌芽は早くにみられるが, 鎌倉時代に理論化され, 後世多くの神道説を生み出した, 両部, 両部習合神道, 神道習合教, 真言神道.

表-16 氏神の分類
Table 16. The classification of tutelary deities.

タイプ	特徴
村氏神	現在最も一般的なタイプ。ある一定の地域内に住むものは全部、氏子としてその祭りに奉仕している神社。
屋敷氏神	村タイプより古い形態。屋敷・農民の住宅地の一隅に斎き祭られている祠。
一門氏神	最も古いタイプ。特定の家に属する者ばかりが、合同して年々の祭祀を営む。

- 69) 宮田登・山折哲雄・渡部昇一・松田義幸（1996）前掲。
- 70) 桑子敏雄（1999）前掲。192-194.
- 71) 鎌田東二（2000）前掲。134-135.
- 72) 吉田博宣（1993）第1部京の森。下鴨神社社の森。（ナカニシヤ出版、東京）。34-46.
- 73) 小椋純一（1992）絵図から読み解く人と景観の歴史。（雄山閣、東京）。p238.
- 74) 松下まり子（1997）江戸時代以降の神戸市太山寺境内林の来歴。植生史研究5：77-83.
- 75) 吉良竜夫（1976）自然保護の思想。（人文書院、東京）。p253.
- 76) 鎌田東二（2000）前掲。132-134.
- 77) 同上。134-135.
- 78) 千田智子（2002）国土再編における「廃絶」と「保存」の倫理。環境と国土の価値構造 桑子敏雄編。（東信堂、東京）。p31.
- 79) 吉良竜夫（1976）前掲。p253.
- 80) 主に歴史学の分野から。安丸（1998）。森岡（1987）。桜井（1992）などの指摘がある。
- 81) 鎌田東二（2000）前掲。p142.
- 82) 本郷高德（1933）郷土風景と神社。庭園と風景15（11）：2-3.
- 83) 新谷尚紀（2000）神々の原像。吉川弘文館、東京。
- 84) 同上。p4.
- 85) 同上。7-9.
- 86) 柳田による氏神の分類は表-16の通りである。
- 87) 野嶋政和（1995）近代公園の成立過程における国民統合政策の影響。ランドスケープ研究58(5)：25-28.
- 88) 同上。
- 89) 同上。
- 90) 東京市区改正委員会議事録 第14巻：15-16.
- 91) 日本公園百年史刊行会編（1978）日本公園百年史。日本公園百年史刊行会：p56.
- 92) 同上。p61.
- 93) 同上。p70.
- 94) 同上。79-81.
- 95) 上田正昭（2003）前掲。p40.
- 96) 千田智子（2002）前掲。p31.
- 97) 同上。
- 98) 前島康彦（1983）宗教緑地論－社寺境内地の歴史的評価と公園緑地政策におけるその役割－。東京農業大学：227-229.
- 99) 同上。p249.
- 100) 神宮司庁（2001）前掲。p50.
- 101) 上田正昭（2003）前掲。p40.
- 102) 網藤芳男（2001）自然環境と人間 快適環境の社会心理学 岩田紀編。（ナカニシヤ出版、東京）。p49.
- 103) 同上。

- 104) 鎌田東二 (2000) 前掲. p164.
- 105) 仁戸田六三郎 (1973) 日本人の宗教意識の本質. 日本の諸宗教の共存と相互影響における諸条件を通して. (教文館, 東京). 512-513.
- 106) 柳父章 (1977) 翻訳の思想 - 「自然」と nature -. 平凡社, 東京.
- 107) 柳父章 (1982) 翻訳の語成事情. (岩波書店, 東京). p189.
- 108) 田中久文 (2004) 日本の「自然」観の可能性 - 九鬼周造を中心に -. 日本人の自然観. 環境会議 20 : 256-259.
- 109) 岩田紀 (2001) 快適環境の社会心理学. (ナカニシヤ出版, 東京). p50.
- 110) 内山節 (1988) 自然と人間の哲学. 岩波書店, 東京.
- 111) 田中久文 (2004) 前掲.
- 112) 仁戸田六三郎 (1973) 前掲.
- 113) 富永三郎 (1947) 宗教的自然観の展開. 齊藤書店, 東京.
- 114) 同上. p3.
- 115) 福永光司 (1985) 中国の自然観. 自然とコスモス. 岩波書店, 東京.
- 116) 田中久文 (2004) 前掲.
- 117) 菅原聰・北村昌美・市川健夫・赤坂信 (1995) 遠い林・近い森 - 森林観の変遷と文明 -. (愛智出版, 東京). p33.
- 118) 徳永道雄 (2002) 仏教における自然 (しぜん) と自然 (じねん). 日本仏教學會年報 68 (1-13) : 2-3.
- 119) 同上.
- 120) ほうに. 真理にのっとって本来あるがままであること. あるがままの姿. 自然 (じねん). 法然 (ほうねん).
- 121) Dharmata ものがあるがままのすがたに究極的な真実がある. したがって. 人間の計算や営利が加わることを持つことなく既に至りついて完成しているとする見方.
- 122) 徳永道雄 (2002) 前掲.
- 123) 同上.
- 124) 同上. 9-10.
- 125) 菅原聰・北村昌美・市川健夫・赤坂信 (1995) 前掲. p36.
- 126) 同上. p52.
- 127) 神宮司庁 (2001) 前掲. p13.
- 128) 菅原聰・北村昌美・市川健夫・赤坂信 (1995) 前掲. p53.
- 129) 宮田登・山折哲雄・渡部昇一・松田義幸 (1996) 前掲. 51-71.
- 130) 谷泰 (1997) カトリックの文化誌 神・人間・自然をめぐる. (日本放送出版協会, 東京). p125.
- 131) 菅原聰・北村昌美・市川健夫・赤坂信 (1995) 前掲. p34.
- 132) 宮田登・山折哲雄・渡部昇一・松田義幸 (1996) 前掲.
- 133) 神宮司庁 (2001) 前掲. p13.
- 134) 同上.
- 135) ロバート・ハリスン (1992) 森-文明の影. シカゴ大学出版局, シカゴ.
- 136) 谷泰 (1997) 前掲. p118.
- 137) 同上. p121.
- 138) 恒川篤史 (2005) 緑地環境のモニタリングと評価. p73.
- 139) 平田富士男 (2004) 都市緑地の創造. (朝倉書店, 東京). 212-220.
- 140) 日本公園緑地協会 (2002) 造園施工管理. (日本公園緑地協会, 東京). p17.
- 141) 只木良也 (1989) 森林と環境保全. システム農学 5 (2). 39-47.
- 142) 青柳・内藤 (1989) 快適環境の社会心理学. (ナカニシヤ出版, 東京).
- 143) 小形研三, 高原栄重 (1978) 緑地施設の設計. 鹿島出版会, 東京.
- 144) 進士五十八 (1975) 住環境に於けるグリーンミニマムについての研究. 造園雑誌 38 (4) : 16-31.
- 145) 北海道立林業試験場 (1975) 生活環境における土地問題. 農業土木学会誌 46 (11) : 783-789.

- 146) 高原栄重 (1974) 都市緑地の計画. 276pp. 鹿島出版会, 東京.
- 147) 高橋理喜男ら (1972) 広域緑地体系における都市林. (都市林, 林業経営研究所編, 農林出版, 東京). 296pp.
- 148) 浜島繁隆 (1976) 熱田神宮社叢の変形菌. 日本菌学会会報 17 (1), 88-89.
- 149) 天野藤男 (1917) 鎮守の杜と盆踊. 文原堂書店.
- 150) 久保基一 (1973) 鎮守の森. 香川県神社庁香川支部.
- 151) 細田栄治編 (1975-1976) 鎮守の森・日本の歴史・(全7巻). 国文社, 東京.
- 152) 瀬戸剛 (1975) ジオラマ「照葉の森」—鎮守の森を複元の望み (大阪市立自然史博物館特集). 博物館研究 10 (2・3): 32-33.
- 153) 帝国地方行政学会 (1984-1989) 社寺林と法 (全22号). 法律のひろば, 帝国地方行政学会.
- 154) 千葉県林業試験場 (1989) 千葉県におけるスギの樹勢調査—社寺林のスギについて. 千葉県林業試験場研究報告 6: 20-35.
- 155) 大塚美保子 (1994) 社寺境内林に関する住民意識の研究—八尾市域における事例的研究. 家政学研究 40 (2): 90-96.
- 156) 裳華房 (1997) 実験・観察のページ (240) 生き物を見つめる実験と観察 (8) 地域の社寺林による環境評価. 遺伝 51 (5): 55-59.
- 157) 千葉県林業試験場 (1998) 千葉県におけるスギの樹勢調査 (3) 社寺林のスギ. 千葉県林業試験場研究報告 9: 21-33.
- 158) 奈良県林業試験場 (2000) 奈良県内の社寺林におけるスギの衰退 (第2報). 奈良県林業試験場林業資料 15: 25-27.
- 159) 中央学術研究所 (2001) 社寺林に関する研究 (1) 明治神宮の森林造成について. 中央学術研究所紀要 30: 45-68.
- 160) 中央学術研究所 (2002) 社寺林に関する研究 (2) 明治神宮造営地の地理的立地条件. 中央学術研究所紀要 31: 157-175.
- 161) 国文社「鎮守の森」全7巻および帝国地方行政学会「法律のひろば」における連載「社寺林と法」全20が該当する.
- 162) 上田正昭 (2004) 探求「鎮守の森」. 平凡社, 14pp.
- 163) 上田正昭, 上田篤 (2001) 鎮守の森は甦る. 思文閣出版, 5 pp.
- 164) 小野泰正 (1995) ニッコウムササビ *petaurista leucogenys nikkonis* Thomas の社殿・社叢における棲息. *Artes liberales* 56: 93-109.
- 165) 大塚美保子 (1994) 社寺境内林に関する住民意識の研究—八尾市域における事例的研究. 家政学研究 40 (2): 90-96.
- 166) 社叢学会 (2003) 社叢学研究. 社叢学会, 創刊号.
- 167) 社叢学会 (2004) 社叢学研究. 社叢学会 2.
- 168) 上田正昭 (2003) 社叢のうちそと. 社叢学研究, 創刊号, 12-23.
- 169) 上田正昭 (2004) 探求「鎮守の森」. 平凡社, 東京.
- 170) 文化庁 国指定文化財等検索 文化庁ホームページ.
- 171) 史蹟名勝天然紀念物保存法, 1919年制定
- 172) 前掲 3)
- 173) 高木博志 (1997) 近代天皇制の文化史的研究. 校倉書房, 320.
- 174) 同上.
- 175) 前掲 1)
- 176) 前掲 11) 14pp.
- 177) 上田正昭・上田篤 (2001) 前掲 p5.
- 178) 同上.
- 179) 日本大辞典刊行会編 (1972-1976) 日本国語大辞典. 小学館, 東京.
- 180) 藺田稔 (2004) 鎮守の森. (神道史大辞典, 藺田稔ら編, 吉川弘文館). 677.
- 181) 前掲 2)

- 182) 岡田荘司(2004)鎮守の森。(神道史大辞典, 藺田稔ら編, 吉川弘文館), 677.
- 183) 藺田稔(1993)鎮守。日本史大事典4。平凡社, 東京, 1050.
- 184) 同上.
- 185) 藺田稔(1988)前掲
- 186) 前掲2)
- 187) がらん(梵 sagharama の音写「僧伽藍摩」の略, 僧園・衆園と訳す)1僧が集まり住んで, 仏道を修行する, 清浄閑静な場所。2大きな寺・寺院の建物。「七堂」。
- 188) 前掲50)
- 189) 同上.
- 190) 網本逸雄(1999)前掲39-41.
- 191) 前掲21)
- 192) 前掲50)
- 193) 同上.
- 194) 宮脇昭(2000)鎮守の森。新潮社, 東京, 14-15.
- 195) 同上 56-61.
- 196) 同上 113-116.
- 197) 同上 56-61.
- 198) 藺田稔(2004)前掲, 677.
- 199) 宮脇昭(2000)前掲, 56-61.
- 200) 上田正昭, 上田篤(2001)鎮守の森は甦る。思文閣出版,
- 201) かきょう(家郷)ふるさと。故郷。郷里。
- 202) 前掲50)
- 203) 神宮司庁(2001)神道を知る本。おうふう, 東京。
- 204) ディエス・デル・コラル(1967)アジアの旅—風景と文化—。未来社。
- 205) 同上 13pp.
- 206) 前掲50) 56-61.
- 207) 山口輝臣(1999)明治国家と宗教。東京大学出版会, 334-345.
- 208) 前掲50) 56-61.
- 209) 林野発達史調査会編(1960)日本林業発達史 上巻。林野庁, 238.
- 210) 同上 238-239.
- 211) 吉田元(1983)社寺林—その現状と保護について—。密教學19: 90-104.
- 212) 同上.
- 213) 前掲72) 238-239.
- 214) 同上 287pp.
- 215) 同上 345pp.
- 216) 緑地研究会(1974-1984)森林(1号-12号)。土井林学振興会。
- 217) 四手井綱英(1974)社寺林(鎮守の森)の植生。(森林。緑地研究会編, 土井林学振興会, 1), 1-2.
- 218) 佐野和史(1978)社寺林の研究10。(森林。緑地研究会編, 土井林学振興会, 10), 1.
- 219) 四手井綱英(1979)宮ノ森の維持, 保存の意義。(森林。緑地研究会編, 土井林学振興会, 10), 13-19.
- 220) 前掲60)
- 221) 坂本圭児・石原晋二・千葉喬三(1989)岡山における社寺林の研究(1)—市街地およびその近郊における全体構造—。日本緑化工学会誌15(2)
- 222) 萩野伸三郎(1926)古社寺保存と史跡保存(上)。史蹟名勝天然紀念物第一集第四號: 1-4.
- 223) 赤坂信(2000)「史蹟名勝天然紀念物」時代の保存事業。生物学史研究 65: 47-53.
- 224) 黒板勝美(1915a)史跡猪遺物保存に関する研究の概説(承前)。史蹟名勝天然紀念物第一卷第四號: 29-30.
- 225) 萩野伸三郎(1926)古社寺保存と史跡保存(上)。史蹟名勝天然紀念物第一集第四號: 1-4.

- 226) 萩野伸三郎 (1926) 古社寺保存と史跡保存 (中). 史蹟名勝天然紀念物第一集第六號: 1-6.
- 227) 萩野伸三郎 (1926) 古社寺保存と史跡保存 (下). 史蹟名勝天然紀念物第一集第九號: 1-10.
- 228) 平澤毅 (2004) 文化財の保護と近代のランドスケープ遺産. 平成 16 年度日本造園学会分科会. ランドスケープ近代化遺産を考える―「風景」と近代化: 42-47.
- 229) 高木博志 (1997) 前掲.
- 230) 鈴木ら (1997) 文化財指定をめぐる. 月刊文化財 411: 11-23.
- 231) 柳五郎 (1992) 大正期における官林地公園の基盤的変化. 造園雑誌 55 (5): 61-66.
- 232) 三好学 (1918) 日本紀念植物の保存に就て. 史蹟名勝天然紀念物第二卷第十一號: 81-83.
- 233) 林野庁発達史調査会 (1960) 日本林業発達史 上巻. 779pp, 林野庁.
- 234) 同上.
- 235) 内務省達番外 (1892) 内務省明治十五年八月二日内務省達番外.
- 236) 神保小虎 (1914) 貴重なる天然物の破壊と其保護. 史蹟名勝天然紀念物第一卷第二號: 4-5.
- 237) 白井光太郎 (1915a) 神社境内の樹木の保護に就て. 史蹟名勝天然紀念物第一卷第五號: 38-39.
- 238) 三好学 (1918) 日本紀念植物の保存に就て. 史蹟名勝天然紀念物第二卷第十一號: 81-83.
- 239) 天然記念物保存事業の組織 (1915) 史蹟名勝天然紀念物第一卷第三號: 22-23.
- 240) 史蹟名勝天然紀念物保存要綱草案 (1918) 史蹟名勝天然紀念物第二卷第二號: 9.
- 241) 史蹟名勝天然紀念物保存法 (1919).
- 242) 沼田真 (1961) 巨樹名木と原生林―我が国の植物保護. 自然保護 7: 6-7.
- 243) 本谷勲ら (1979) 自然保護の生態学―野生生物の保護と管理―. 274pp, 培風館.
- 244) 文化庁 国指定文化財等検索. 文化庁ホームページ.
- 245) 吉澤庄作 (1936) 日本海東北沿岸に於ける著明なる暖帯自然林としての越中宮崎鹿島社叢 (上). 史蹟名勝天然紀念物第十一集第八號: 595-609.
- 246) 吉澤庄作 (1936) 日本海東北沿岸に於ける著明なる暖帯自然林としての越中宮崎鹿島社叢 (下). 史蹟名勝天然紀念物第十一集第九號: 686-692.
- 247) 文化庁 国指定文化財等検索. 文化庁ホームページ.
- 248) 田阪美徳 (1941) 神社境域と天然紀念物. 史蹟名勝天然紀念物第十六集第十一號: 663-671.
- 249) 第十三回指定史蹟名勝天然紀念物 (二) (1928) 史蹟名勝天然紀念物第三集第四號: 390.
- 250) 法令全書 (1919) には以下の様に書かれている.

『史蹟天然紀念物調査会官制 (抄)』

- 第一条 史蹟名勝天然紀念物調査会ハ内務大臣ノ監督ニ属シ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ関スル事項ヲ調査審議ス
- 第二条 調査会ハ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ関シ内務大臣ノ諮問ニ応シテ意見ヲ開申シ又ハ内務大臣ニ建議スルコトヲ得
- 第三条 調査会ハ会長一人及委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外必要アル場合ニ於テハ臨時委員ヲ置クコトヲ得
- 第四条 会長. 委員及臨時委員ハ関係各庁高等官及学識経験アル者ノ中ヨリ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
- 第五条 会長ハ会務ヲ総理ス
会長事故アルトキハ内務大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス
- 第六条 調査会ニ幹事並考査員及書記若干人ヲ置ク
幹事ハ内務省高等官ノ中ヨリ. 考査員ハ学識経験アル者ノ中ヨリ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
書記ハ内務省判任官ノ中ヨリ内務大臣之ヲ命ス
- 第七条 幹事ハ会長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
考査員ハ上司ノ指揮ヲ承ケ考査ニ従事ス
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

- 251) 赤坂信 (1998) 戦前の日本における郷土保護思想の導入の試み. ランドスケープ研究 61 (5): 401-404.

- 252) 篠田真理子 (2000) 学術的意義と地域性との隘路－大正期の天然記念物調査報告に基づいて－. 生物学史研究 65 : 15-31.
- 253) 三好学 (1940) 天然記念物解説. 富山房.
- 254) 内務省 (1919-1924) 史蹟名勝天然記念物調査報告. 白鳳社.
- 255) 神保小虎 (1914) 前掲. 4-5.
- 256) 黑板勝美 (1915a) 前掲. 29-30.
- 257) 三好学 (1921) 史蹟名勝天然記念物保存要目中植物の解説. 史蹟名勝天然記念物第四卷第五號 : 59.
- 258) 三好学 (1940) 前掲.
- 259) 篠田真理子 (2000) 学術的意義と地域性との隘路－大正期の天然記念物調査報告に基づいて－. 生物学史研究 65 : 15-31.
- 260) 神保小虎 (1914) 前掲. 4-5.
- 261) 黑板勝美 (1915a) 前掲. 29-30.
- 262) 黑板勝美 (1915b) 史蹟遺物保存に関する研究の概説. 史蹟名勝天然記念物第一卷第三號 : 20-21.
- 263) 宮地直一 (1922) 神社と史跡. 史蹟名勝天然記念物第五卷第十一號 : 121-124.
- 264) 尾佐竹猛 (1940) 明治初期に於ける破壊思想と保存思想 (上). 史蹟名勝天然記念物第十五集第一號 : 20-27.
- 265) 本田正次 (1940) 天然記念物と日本精神. 史蹟名勝天然記念物第十五集第十號 : 690-692.
- 266) 白井光太郎 (1915a) 前掲. 38-39.
- 267) 同上.
- 268) 白井光太郎 (1915b) 史蹟名勝天然記念物の保存に就て. 史蹟名勝天然記念物第一卷第七號 : 55-60.
- 269) 白井光太郎 (1922) 厳島の植物美保存 (上). 史蹟名勝天然記念物第五卷第八號 : 85-86.
- 270) 白井光太郎 (1990) 白井光太郎著作全集. 白井光太郎著作全集VI. 355pp
- 271) 南方熊楠全集第九卷書籍Ⅲ (1973) 白井光太郎宛書簡. 南方熊楠全集第九卷書籍Ⅲ. 497.
- 272) 白井光太郎 (1990) 前掲.
- 273) 白井光太郎 (1926) 保存小話. 史蹟名勝天然記念物第一集第八號 : 52-56.
- 274) 同上.
- 275) 白井光太郎 (1911) 神社の合併史蹟名勝の破壊は国家の深憂. 日本及日本人.
- 276) 鳩山一郎 (1932) 本會評議員理学博士白井光太郎君哀悼辞. 史蹟名勝天然記念物第七集第七號 : 190-191.
- 277) 三好学 (1932) 理学博士白井光太郎君を憶ふ. 史蹟名勝天然記念物第七集第七號 : 692-695.
- 278) 篠田真理子 (2000) 前掲.
- 279) 同上.
- 280) 三好学 (1921) 前掲.

(2006年4月28日受付)

(2006年9月11日受理)

Summary

This monograph consists of 5 chapters.

<Chapter 1> clarifies the background, purpose, and placement of this study. First of all, the chapter gives an account of the problem and problem consciousness to be reflected in this study. Then, the chapter makes an attempt to give a position to this study and clarifies its purpose and method by taking a survey of flow and placement of relevant study and putting approach and methodology of each study in order.

The purpose of this study is to clarify the significance and validity of evaluating “Shasoh” from the point of view of green space, and the following 3 points are established as the specific purpose

of this study.

- ① 【To clarify the relationship between the space perception of Shintoism and creation of Japanese spatial conception towards nature】
- ② 【To clarify the spatial conception of the “open space of the shrine”】
- ③ 【To clarify the spatial conception of “Shasoh” and changes of their meaning】

<Chapter 2>, <Chapter 3> and <Chapter 4> clarifies the intention of studying “Shasoh” after clarifying the history, phenomena, and terms that are related to nature, Shintoism, and shrines through the research of documents.

First, in order to clarify the relationship between the spatial perception of Shintoism on nature and the spatial conception of the Japanese people towards nature, the chapter selects analysis documents (4,159 corresponding documents) among literatures (555 corresponding literatures) and analyzes the relationship between the transition of the placement of “nature” and the spatial perception of the Japanese people based on the transition of interpretation and comparison with the West. As a result, it was discovered that there are many things in common between the concept of nature in Japan the and spirit and spatial perception of Shintoism, and it became clear that the spatial perception of Shintoism was deeply connected with the creation of spatial conception towards nature in Japan.

Secondly, the chapter compares some synonyms used in the outdoor space of a shrine and analyzes the meaning and sense of each word on every existing literature that contains the word “Chinju”, “Shaji”, or “Shasoh” in their title. As a result, it was discovered that the tendency to combine “Shasoh”, “Chinju”, or “Shaji” with words such as “mori” and “hayashi” became conspicuous in the mid-1970s. With this as a turning point, it became obvious to recognize the outdoor space of the shrine as a green space scientifically. Also, there is a disparity between those concepts in that the word “Shasoh” itself innately contains conceptions such as nature and green while “Chinju-no-mori” and “Shaji-rin” are spatial conceptions that have been established by adding concepts such as nature and green afterwards. It became clear that “Chinju-no-mori,” which has been used for a space to worship native spirits or gods from the ancient times, does not always have to be applied to shrines. Rather, it is a spatial conception in the broad sense, provided that it contains locality, since the word “Chinju” has developed as a space where various definitions are possible, as it has been noticed as an object of ecological research, where potential indigenous vegetations grow. “Shajirin” is a word which had been used for woods and forests that shrines and temples possess, as one of the placements of woods and forests under land policy and forest policy in Meiji to Taisho period. It was a spatial concept that contains economical and functional aspects and an image as a political object. While there existed an interpretation to regard “Shasoh” as a spatial conception that contains a wider spatial area than “Chinju-no-mori,” it became clear that “Shasoh” is a spatial conception targeted at natural spaces and green spaces in Shintoism under national policies such as the separation of Shintoism and Buddhism policy and State Shinto, which were intended to distinguish the shrine and temple.

Finally, the chapter analyzes the transition of the placement of “Shasoh” in the course of materialization and management of “Preservation of old shrine and temple law” and the use of the

word “Shasoh” by selecting documents related to “Shasoh”, “Jinja”, and “Shaji” among all documents in “Shiseki Meisho Tennen Kinenbutsu Magazine” in order to clarify the mean of the word “Shasoh” and its significance. As a result, the reason “Shasoh” was listed first on the items of “Preservation of old shrine and temple law” became clear. It was a consequence of the growing awareness of the necessity to preserve “Shasoh” not only as botanically and ecologically superior forests, but also as places which possess a compound value, as well as a movement against the “Shrine merger act” which broke out at that time.

Further, the shade of meaning of a word “Shasoh” gradually changed as time progressed. Eventually, the compound meaning became forgotten and the word “Shasoh” gradually turned its meaning to the forest subordinate to primeval forest which belongs to a shrine.

As a result of that research, <Chapter 2>, <Chapter 3> and <Chapter 4> clarifies the significance and validity to semantically evaluate the space in shrines from a viewpoint of a green space by clarifying the spatial conception towards outdoor space in the shrine and displaying the appropriate terms to express the space.

<Chapter 5> gives the conclusion of this study by reorganizing the evaluation of “Shasoh” as a green space in urban areas, based on the results of the previous chapters.

Key words: Shasoh, green spaces, nature, space, the side of meanings